

16
125
96

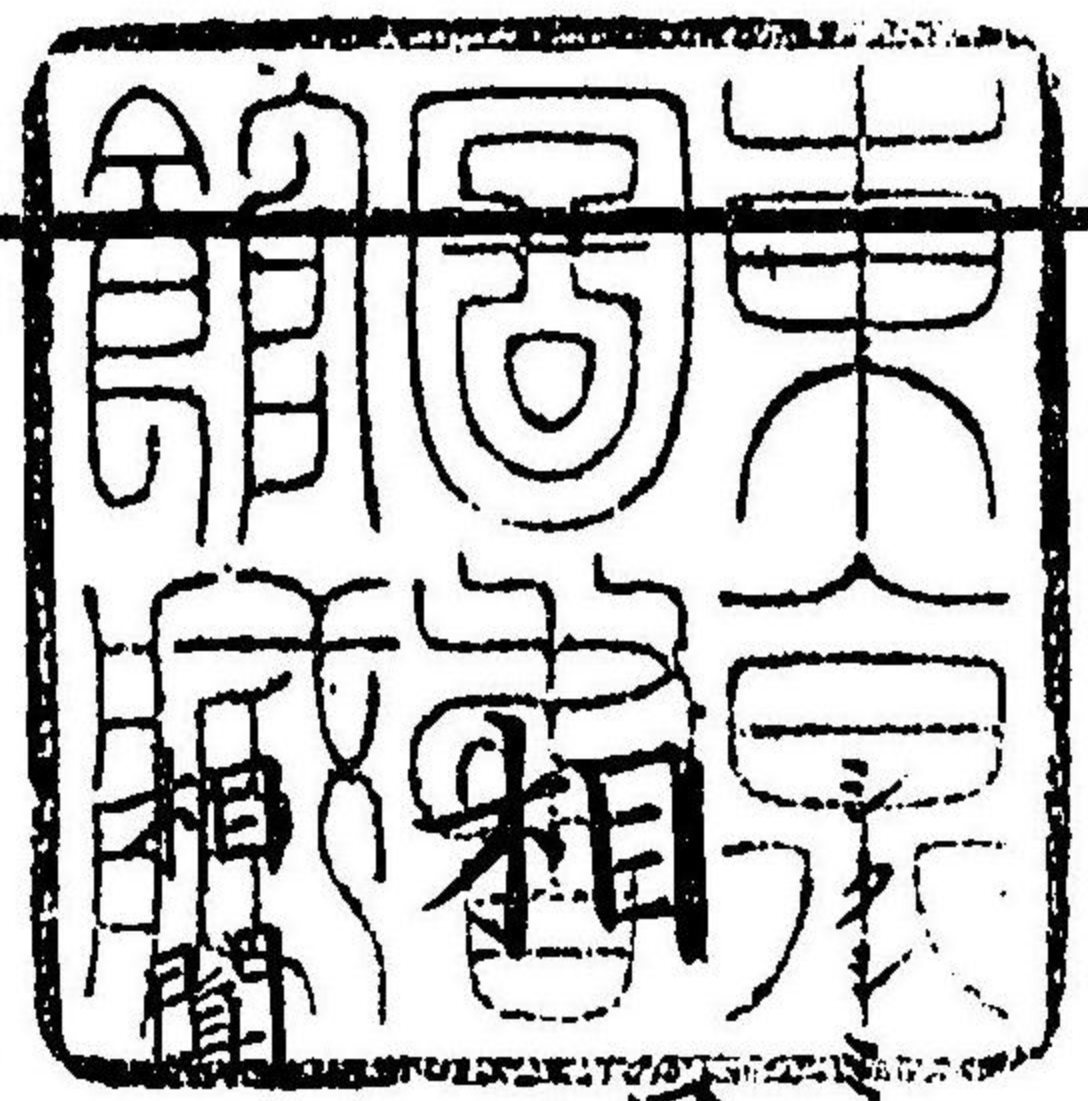
嘉
治
三
年
庚
子
秋
八
月
八
日
庚
子
秋
八
月
八
日

東 京 圖 書 館
類 屬 一 六 四 九
冊 九 六 號

明治十九年九月十一日内務省交付第750号

萬葉集古義二卷之上

土佐國 藤原雅澄撰



聞ウタ

ハ字ハ拘らばしてシタシミウタと稱ふ其ハ
挽歌と書るをカナシミウタと稱イる類なりさてかく
いふ所以ユエ又相聞の字れ出處且寧樂人のこの熟字を
とり出て歌の名目よ志する謂など委しく首卷よ
へ里かくてこの標中ハ男女の間よりはどめて親
族兄弟朋友のうへをかぬここあそ相志こしめる歌

萬葉古義二上

どもを載り、中古已來の歌集よ、戀部と云ふ似
て、まゝ不甚廣き稱なま。此集よは戀部ハ分ず、戀歌
ハみな相聞よこもせま。
ナニ
ハノ
タカ
ツノ
ミヤニ
アソシタシロシシ、
スソラ
ミコトノ
ミヨ

難波高津宮御宇天皇代

難波、高津宮ハ、攝津志よ、東生郡大坂安國寺坂北有、小
祠、此其古蹟、一名難波宮、又大宮、又大郡宮、又忍照宮と
有、但し一名を大郡宮といへるハ、みどり説あり、大郡
ハ書紀よもかゝく見え、それど、高津宮と一なるべ
き由ハ、さらよ見え、難波の古圖、今の大坂より南へ住
ずと本居氏いへり、吉のあさりまゝ、長くつゞき、る岸ある、それ即難波
津よて、岸の上なまけるよよりて、高津と云なるべく、

宮ハ或人、今の大坂の内ありといへり、と古事記傳よ
いへり、金葉集よ、古の難波の事を思ひ出て高津の宮
よ月の澄らむ、今世よかうづを、高津と書て、此大宮を
もめる、蝦蟇行宮あり、と谷川氏云り、古事記下卷云、大雀命坐難波、高津
宮、治天下也、書紀仁徳天皇卷云、元年春正月、都難波、是
謂高津宮、云云、初天皇生日、木菟入于産殿、明且譽田、天
皇喚大臣武内宿禰、語之曰、是何瑞也、大臣對言、吉祥也、
復當昨日臣妻産時、鷓鴣入于産屋、是亦異焉、爰天皇曰、
今朕之子、與大臣之子、同日共産、兼有瑞、是天之表焉、以
為取其鳥名、各相易名、子為後葉之契也、則取鷓鴣名、以

名太子曰大鷦鷯皇子。取木菟名号大臣之子曰木菟宿禰。○天皇代の下。舊本等よ大鷦鷯天皇と注し。古寫本よは。謚曰仁徳天皇といふ註も有り。共よ後人の志にざりること。既く云る如し。

オホ キサキ シヌハシテ スノラ ミコトラ ヨミマセル ミウタ

般石姬 皇后思 天皇御作歌

四首

皇后ハ古事記小大雀命娶葛城之曾都毘古之女石之日賣命大書紀小仁徳天皇二年春三月辛未朔戊寅立

磐之媛命為皇后后生大兄去来穗别天皇履往吉仲皇子瑞齒别天皇正反雄朝津間推子宿禰天皇元三十年秋九月乙卯朔乙丑皇后遊行紀國云云是日天皇伺皇后不在而娶八田皇女時皇后聞而大恨之云云更還山背興宮室於筒城岡南而居之三十五年夏六月皇后磐之媛命薨於筒城宮三十七年冬十一月甲戌朔乙酉葬皇后於那羅山諸陵式に平城坂上墓磐之媛命在大和國添上郡北城東西一町南北一町無守戸令楯列池上陵戸兼守と見ゆ續紀よ天平元年八月詔難波高津宮御宇大鷦鷯天皇葛城曾豆比古女子伊波乃比賣命皇后止御相坐而食國天下之政治賜行賜

家利云云とも見えたり。履中天皇卷よ。母曰磐之媛命。
 葛城襲津彦女也。と見ゆ。皇后の御名を書るの例よ。多
 ぶへり。後人の志わざなるべし。近頃江戸人の説よ。磐
 姫命ハ臣の女なれば。
 實ハ彼御時ハ、皇后ハ立まさば妃夫人の列よ。て
 あましなるべし。志あるを履中天皇反正天皇允恭天
 皇三御世の天皇の大御母よ。ましくつれば、其三御世
 のほとふ尊み崇めて皇后と申しけるが、後より前よ
 及して志ク御記一つきども、まことハ皇后よ。まさば
 ければ、その御世よりと、なへはるまよ。御名をよ。そ
 ろむか、その多くなり。記一傳へるとあり。されば、此磐姫二字
 きひがことなり。とて削去む。中よ。古を失へるわ
 ざなりと云り。此説さることなるべく。おやゆ。志
 ども皇后と記さむ。からよ。御名をつと。まよ。げなく
 るさむ。ハゆ。し。けれ。ば。な。ほ。後。人。の。志。と。置。べ。し。皇。后
 あり。べし。か。よ。か。く。此。二。字。を。ば。姑。と。關。置。べ。し。皇。后
 ハ。公。式。令。義。解。云。下。よ。大。后。と。同。ト。く。オ。ホ。キ。サ
 謂天子嫡妻也。

キと訓べし。はべて古ハ當代天皇の大御母の后位よ
 登里まし、を字よハ皇太后と書て。オホキサ大御祖オホミヤを申し當
 代の嫡后を字よハ皇后と書て。大后と申せり。これ古
 の定なり。後世皇太后を於保伎佐伎を申し。當代の嫡
 后を伎佐伎とのみいふよ。ならひて。古を誤
ることされば當代の嫡后を。オホキサ大后と申せること。古事
 記書紀よも往々見え。又風土記よも其證見え。此集よ
 も下よのさぐあま。なほ二中オホキサよ。委辨へ多るを見て
 考べし。○四首ハ。此ハヨツと訓べし。九て三首四首な
 どあるを。ば。處よよりて。ミウ。タ。ヨウ。タ。或ハミツヨツ
 と訓べし。幾字多と云るハ。書紀神代卷よ。此兩首歌辭

云云皇極天皇卷よ。謡歌三首など見え。古事記よ。總て二歌三歌四歌などのみ記されり。古今集序よ。此ふさうさの云とあり。伊久都と云る。土左日記よ。一うさよことのあるねが今ひとつ。公忠集よ。貫之が許よりおこせりける歌ぬさつ。貫之集よ。亭子院の御門の歌合し給よ。歌ひとつ奉れとあるよ。枕冊子よ。圓融院の御時御前よ。てはうしよ。歌ひとつあけと。殿上人よ。おんせられけるを云と。又歌よみ給つといふよ。よきことひとつの何せむ。同じうのあまさをつう。うまつむまどいふほとよ云と。榮花物語よ。題ふ

つき出させ給ひく。歌ぬさつげくもて

まつせ給ふ云と。など云る類多し

君之行。氣長成奴。山多都禰迎。

加將行待爾可將待。

君之行と。君ハ天皇を指て申賜へ。里行ハ體言よし。旅行道行行。行の隨意。行幸のあや。即御幸の由伎なり。九卷二十丁よ。君之三行。行者を。五卷二十丁よ。積美可由。り美由伎。やいふ。古言。那。留志。滿乃。已太。知母。可牟。伎氣。那。我。久。奈。理。努。奈。良。遲。那。留。志。滿。乃。已。太。知。母。可。牟。

佐飛仁家理十九三四丁。ふ君之往若久爾有婆三卷三十一丁。吾行者久者不有北卷四十丁。ふ和我由伎乃伊伎都久之可婆などもあま。行の言皆同じ。○氣長成奴ハ已く月日久しく成ぬやいふなり。氣長ハ來經長よて。月日問ふるを云古言なり。既く一巻ふ出奴ハ已成の奴なり。○山多都禰ハ都の清音の字を書るハ正しうらぶ。ふ多頭禰と何山尋ふく行幸し山路を多豆ねるなり。○迎加將行は迎へ行むの謂なる。加の言ハ將行の下ようつて意得べし。○待爾可將待ハ直待よ待むの謂なり。この可の言も將待下ようつて意得

べし。○御歌意ハ天皇の行幸シハ已く月日久しくなまぬ。今ハこの山路を尋ねて迎へよ行べき。又ハかへりまさむを直待よ待居べき。いかさま待居るよは得堪まじけきむいぢむるへよこそ行免との御意なるべし。但し磐姫皇后の存座し不と。天皇の他所よ行幸しこと見えぬ。君が行けなぐくなりぬと宣をむことおやつらなし。此一首ハ下よ引る古事記歌を誤里傳へあるぬるべし。なや下よ載る古事記よ就て云べし。

右一首歌。山上憶良臣類聚
歌林載焉。古事記曰。輕太子
奸輕大郎女。故其太子流於
伊豫湯也。此時衣通王不堪
戀慕而追往。時歌曰。君之行
氣長久成奴。山多豆乃迎乎
將往待爾者不待。此云山多
豆者。是今造木者也。右一首
歌。古事記與類聚歌林所說
不同。歌主亦異焉。因檢日本

紀曰。難波高津宮御宇大
鷦鷯天皇廿二年春正月。
天皇語皇后曰。納八田皇女
將為妃。時皇后不聽。爰天
皇歌以乞於皇后云云。三十
年秋九月乙卯朔乙丑。皇后
遊行紀伊國。到熊野岬。取其
處之網葉而還。於是天皇
伺皇后不在而娶八田皇女。
納於宮中。時皇后到難波濟。

聞^ミ天皇合^メ八田皇女^ヲ大恨^ニ
之^ヲ云云亦曰^ク遠^ク飛鳥宮御^ニ
宇雄朝孀稚子宿禰^ニ天皇二
十三年春正月甲午朔庚子
木梨輕皇子爲太子容姿^カ佳^キ
麗^ク見者自感同母妹輕^ク大^{オホ}娘^{イラツシ}
皇女亦艷妙也云云遂竊^ク通^ク
乃悒懷少息廿四年夏六月
御羹汁凝以作冰^ニ天皇異^ニ
之^ヲ卜其所由^ヲ卜者曰^ク有^リ内亂^ニ

蓋親親相姦乎云云仍移大
娘皇女於伊與者今案二代
二時不見
此歌也

古事記曰云云の文歌共よ舊本下の或本歌曰居明而^ハ
云云の下よ本文此列よ載しハ誤きるものなりべし
故今改て此間よ小書せりさて此は彼記をあーく見
て引しものなり其ゆゑハ古事記云天皇^名恭崩之後^{天皇}
定木梨之輕太子所知日繼未即位之間姦其伊呂妹輕
大郎女而歌曰云云是以百官及天下人等皆輕太子而

歸穴穗御子爾輕太子畏而逃入大前小前宿禰大臣之家而備作兵器云云故其輕太子者流於伊余湯也亦將流之時歌曰云云其夜通王獻歌其歌曰云云故後亦不堪戀慕而追往時歌曰岐美賀由岐氣那賀久那理奴夜麻多豆能牟加開表由加牟麻都爾波麻多士此云と云里そゆく此太子の流れ賜ふは備作兵器云云ふよりておのこもよこそあれ其本縁は軒賜ひしよりのことなりきども多だよ軒賜ふ故よ流れしふの阿らばる哉や○奸字拾穗本より姦字のけ里○夜通王は輕大郎女の亦名なり○追往追字舊本遣よ誤き里古寫本拾

杉本清隆のいへるハ加納諸平が云けらく枕詞山多豆之迎とついでいへる山多豆ハ木の名なり古事記下巻夜麻多豆能牟加開表由加牟麻都爾波麻多士見古事記三十九卷其ハ今とらうす又字鏡女貞實の下比女波木又造木

穗本まゝ古事記の従つ○君之行は君ハ太子を指行の意ハ上よ云ふ如し○山多豆乃ハ本居氏云山斫之形るべし迎の枕詞なりさて迎をづく所由ハ凡そ斫ハ又を吾方へ向へて用ふ物なりハな里大よと又物の中よ又を此方此まにに向けて用多ハ此物のみなり故迎の枕詞と形るなり○迎乎將往ハ本居氏迎將行なり乎ハ助辞なり迎行やハ迎よ行といふよ同じ云里六卷二十ふ山多豆能迎參出六公之來益者や阿り○待爾者不待ハ本居氏云師の待ふ不堪なりと云れ多る上ふ不堪戀慕と阿るや合せそ思ふよ信

と註せり。又古
き歌よ。春され
ハめいむ。垣根
のみろつこ木
我こそまきよ
思ひそめしう
とよめること
も何せらむよ
て見たりき山
多豆ハこの造
木よて。今國
よりて。尔波寺
許とも多豆と
もいへり。此水
春の始諸木よ
さき立て。芽の
出る木あはら
枝葉とも他木
の如く。片違よ
ハ出だして。對
ひ合て出さふ

よりて山多豆
の對と云意よ
云のけしあら
むとかさねり
といへりき。今
按よ。尔波寺許
と云ハ造を記
れる稱あるべ
し。さてその造
木の古名を山
多豆と稱りと
ねほえされハ
まことよ。所以
あることよて
この考是れり
と云べし。抑こ
の木ハ漢名接
骨木といふも
のよて。其高さ
一丈と餘れり。
深山よハ自ら

よ其意なるべし。○歌意ハ。君ガ流多れ行まし。こ
月日間経ぬ。今ハ迎よこそ行免待よハ得堪じをせな
り。○是今造木者也ハ。木居氏造字ハ建を誤れるもの
なるべし。イ。マ。ノ。タ。ツ。ゲ。ナ。リ。セ。訓。べ。し。建。木。は。借。字。よ
て。立。削。鑿。形。ど。阿。る。名。なり。せ。云。里。そ。も。く。上。件。ハ。古。事
記傳九卷ふいと委曲よ論へきハ。其を披見て考べし。
今ハ多だ大あとの意を註しつるあり。○歌主。二字。拾
穂本よハ作者や作里。○馬。字。拾穂本よ也。や作里。○因
檢日本紀曰云云と云よりハ。まゝ淺はかなる註ども
那里こハ既くいひし如く。とやより此哥を誤里傳し

なれば。やよのく論ふまでもなし。○語皇后曰の曰字。
舊本脱せ里。書紀よ据て補つ。○皇后下云云の二字。
舊本よ之や作るハ誤なり。今ハ古寫本元曆本拾穂本
等よ従つ。○岬。字。舊本岬よ誤。今書紀よ従。改。拾穂本
よハ崎と作里。○雅。字。舊本雅よ誤。○羹。汁。凝。の。上。書。紀
よ膳字あり。羹凝の二字。舊本美疑よ誤。古寫本拾穂本
書紀等に従里。○姦。字。古寫本よは姦や作里。○歌也の
也。字。拾穂本よはぬし。

如此許戀乍不有者高山之磐石

生ひこるも多
きよし又人家
よ裁まらもそ
こバク取らざ
てこれを多豆
乃木とも木多
豆ともカ波等
許とも云よし
小野博いへり
この木の葉も
花も實も漢名
蒲葎と云もの
ふ似こるがそ
の蒲葎と云も
のを草多豆と
云それを即漢
名接骨草とも
云ふと云ふ
く本草啓蒙よ
あつせりされ
ハ被土よても

根四卷手。死奈麻死物乎。

如此許字を拾穂本ハ集中よ多き詞あり。五卷丁三十
よ。可久婆可里須部奈伎物能可也假字よてもあり○
戀乍不有者ハ戀乍有むと里はといふ意此古語なり。
岡部氏ガ説ハく多く一々志。此下よ遺居而戀管不有
てまぎらはしむことなり。ハオヒシカムミナクミニシユモカセセモコニコヒツアラガ
者追及武道之阿田爾標結吾勢又吾妹兒爾戀乍不有
ハアキハギノサキテナリヌルハナナラマシラ
者秋芽之咲而散去流花爾有猿尾四卷ふ後居而戀乍
アラガハキノクニノイモセノヤニアラマシモヲ
不有者水國乃妹背乃山爾有益物乎又如是許戀乍不
有者石水二毛成益物乎物不思四手又外居而戀乍不

接骨木接骨草
と稱て草木の
種をわかし此
方よても木多
豆草多豆と云
て草木の品を
別とすたのづ
あらのことお
るべし。のくて
その木多豆の
稱を上古ハ山
多豆といへり
しよよりて古
き歌よかくハ
よめよよをあ
るべき

有者君之家乃池爾住云鴨二有益雄ハ卷よ秋芽子之
上爾置有白露乃消可毛思奈萬思戀管不有者十一ふ
劔刀諸又之於荷去觸而所殺鴨將死戀管不有者又住
吉乃津守網引之浮笑緒乃得于蚊將去戀管不有者又
如是許戀乍不有者朝爾日爾妹之將履地爾有申尾又
白浪之來縁島乃荒磯爾毛有申物尾戀乍不有者又吾
妹子爾戀乍不有者薦薦之思亂而可死鬼乎十二ふ何
時左右二將生命曾凡者戀乍不有者死上有又後居而
戀乍不有者田籠之浦乃海部有申尾珠藻苳々みな同
も多三卷ふ中々二人跡不有者酒壺二成而師鴨酒

二染嘗四卷ふ吾念如此而不有者玉二毛我真毛妹之
 手二所纏年五卷ふ於久禮為天那我古飛世殊波彌曾
 能不乃于梅能波奈爾母奈良麻之母能乎十一ふ中々
 二君二不戀者枚浦乃白水郎有申尾玉藻刈管十二ふ
 中々二人跡不在者桑子爾毛成益物乎王之緒許古事
 記仲哀天皇條忍熊王歌よ伊奢阿藝布流玖麻賀伊多
 豆淤波受波邇本杼理能阿布美能宇美邇迦豆岐勢那
 和書紀允恭天皇卷ふ爰以為徒非死者雖有罪何得忍
 乎本居氏云非死者は死ぬねど何る皆同し語の格ふ
 り猶本居氏詞瓊綸七卷ふ出づ委し○高山ハ何處ふ

まれ多だ山のことなま高は軽く見べし○磐根四卷
 手ハ磐を枕せしめての意なり根は草根垣根ねの根
 ふてそへいふ詞よて多む磐のことなり四はその一
 をぢをせりしていふ助辭あり卷ハ枕よむるをい
 ふあること既く一巻よ云るか如し○死奈麻死物乎
 允て死をシといふは須藝の切よてシナマシはスギ
 ナマシなり書紀雄畧天皇卷ふ伊能致志讎磨志五卷
八丁疑南伊能ぞ何里集中ふは處處ふ多く見えたり
知周疑南を死字音と意得るは古言志 ○御歌意ハか不とまふ
 らぬをこ人乃こざそりし
 尔君を戀しく思ひつゝ何らむよりハ中々よ山の磐

を枕として死なましものきやぬり山の磐を枕とし
 て死るはくるしきこ空ののぎりなるをさばのりく
 るしきことよ何ふも君を戀しく思ふよりハ猶まさ
 きりとなり磐を枕とまるとは集中より多く旅などよ何
 りて艱難と死ぬることふ云ハことは御思ひを甚し
 くの給はむせて其を譬に取出給へりときこえ多り
 然るを註ぎもよ磐
 根を巻ハ葬るさま
 をいへるなりと何
 るはいりよそや

アリツ、モ キミヲ バ マタム ウチナビク アガクロ
在管裳君乎者將待打靡吾黑

カミニシモノオクマテニ
髮爾霜乃置萬代日。

在管裳は在々乍もぞいはむがごとく一在ハ在待在通
 ぬぞいふ在ふて絶ぬさまをいふ辭なり○打靡はウ
 チナビクと訓べし髮へかゝるる詞あり舊本よウチ
 系と見むは非し霜へ○霜乃置萬代日ハ夜深て霜降置
 及ふの意よて左よあげふる或本歌又十二ふ待君常
 庭耳居者打靡吾黑髮爾霜曾置爾家類耳字は西の馬
 四居者風流無三セ何るこきニシ云云乃山ニ如ど
 あるふ同じ五卷ふ迦具漏伎可美爾伊都乃麻可斯毛

乃布利家武也。何るは。年老了。髮斑白。け多るを多也。
 へ多るふて。今とは異き里。此仁徳天皇の御時ふは。未
 ける譬こせハ。取の里一なり。○御歌意ハ。在々つゝ夜
 深て。打靡く黒髪ふ。霜の降までも。内へ入む。て君此
 来坐むをバ。待居むをなり。これハ上の御歌よ。死な
 き。まよと思しめ。一うへ。て。よ。一や思よ。よく堪て。在
 な。が。ら。へ。て。待。む。と。の。多。ま。へ。り。と。も。き。こ。え。と。り
 或本歌曰。居明而君乎者將
 待奴婆珠乃吾黒髪爾霜者
 零騰文。

こハ件の在管裳云々此歌の。或本出多るなり。○居
 明而は夜を起明一ての意よて。集中よ多き詞なり。十
 ハよ。乎里安加之許余比波能麻牟とあるも同じ。○奴
 婆珠乃ハ。黒髪いはむとての枕詞ふ。冠辞考よ委し。
 但しその説ふ。此を野真本居氏云。或人此説ふ。鳥扇の
 玉ねりと何るは。い。り。本居氏云。或人此説ふ。鳥扇の
 葉は。羽ふ似多る故よ。此草を野羽や名づけ。其實を野
 羽玉は云なりと云るそよ。一た。信ふ鳥扇やいひ。
 今俗ふ檜扇やいふも。葉の羽よ似多るよしなり。○霜
 者零騰文ハ。シ。モ。ハ。フル。ト。モ。を訓るよ。り。
 し。騰字を書るは正一のらむ。清て唱べし。

右一首。古歌集中出。

右の或本歌舊本よは秋田之云云此歌乃次よありて
本章に順ふ載多り。今は拾穂本ふ従ふこゝよ入まこ
小字を以、但し彼本ふは一云

秋田之穂上爾霧相朝霞何時
邊乃方二我戀將息

秋田之を舊本秋之田を阿るは例の下上ふ誤き里し
那里今は拾穂本ふ従つ。此下十四ふ秋田之穂向乃所
縁四卷十七ふ秋田之穂田乃刈婆加八卷三十ふ秋田
乃穂田乎馬之鳴十卷五十ふ秋田之穂上爾置十七
丁ふ秋田乃穂牟伎見我底利などある例那里○穂上
爾霧相とハ穂ハ稻穂を云神代紀下卷ふ以吾高天原
所御齋庭之穂云云。非じ。此處を古語拾遺ふ載
了。是稻穂也と註せるをも思ふべし。も。和。ホ。と
よまむふは。志。の。こ。と。し。ら。ら。よ。註。に。び。き。よ。あ。ら。む。
撰萬葉下卷ふ幾之間丹秋穂垂濫などあり。集中ふは
多だ穂と云ること。ふよ那く多し。穂乎之勢爾押靡。

霧相はキルの延る言ふて、相、字ハ、落相流、相、あど書
 リアの切ラを遊き、雨疑流水疑流あどのギル、アアの
 バ、借て書るはみあり、集、拾遺
 いくて、こゝは霞の立形びくゆまを云るなり、集、拾遺
 花霞あまぎる山の端も日霧をいふも、即キル、體言
 もあげろふの夕暮の空、霧をいふも、即キル、體言
 ふなれるもれそ、岡部氏、云、きらふハ、くもりをいふと
 とより別あ、既く一卷、中、近江荒都歌の下よ委、云里、さ
 となるをや、云、きらふハ、くもりをいふと
 てこゝよかく伸て云るハ、その霞の立なびくさまの
 引つゞきて、絶び長緩としとる趣なり、朝霞とハ、朝
 ハことよ深く立ものなれば云るあり、さて霞ハ春霧
 は秋の物と能み定るは、後世のことよして、古はいつ

も云る中ふ、八卷、三十四七夕歌ふ、霞立天河原爾云云や
 よ急るや、こゝなるや、は秋よいへ里、或人は、去の、八卷
 の誤ならむと云れど、いあらむ、霧の多都といは
 むハ、手つゝ、形り、讚岐典侍日記よ、十二月朔日、まだ夜
 きこえて大極殿よまぬ、云、ほのぼの、な明はな
 る、ほやよ、かはらや、どものむぬ、かほみわ、さりて、何
 るをみるに云く、これ、○何時邊乃方二ハイツへノカ
 は冬なるよ霞を云里、○何時邊乃方二ハイツへノカ
 タニや訓べし、何時邊乃方二ハイツへノカ
 歟、く、卷よも、何方、いはむ、のごとし、十九よ、吾幾許斯
 奴波久不知爾、霍公鳥伊頭能山乎鳴可將超や、何り。
 岡部氏、伊頭禮乃方と、何る、伊頭邊をいふ
 よ、云る、は、何時邊乃方と、何る、伊頭邊をいふ
 あり、んて、意ハ、同ト、事、於、言、さ、於、異、な、き、バ、重、ね、い、誤
 ふも常のことよ、集中よ、與邊之、於、異、な、き、バ、重、ね、い、誤

萬葉古義二上

六

九丁よ、豫兼（又）而（知）者、又十卷二十丁よ、喧（奈）流聲（之）音（乃）十
 遊（左）な（ど）ゆへ、○御歌意は、秋の田（に）面（よ）立（な）びく朝
 よ見（る）を（せ）也、霞は、何方（を）消（失）るものなるを、我（戀）しく思（ふ）情
 能（い）ふ（せ）さは、何方（よ）消（失）なむものぞや、
 アフ ミノ オホ ッノ ミヤニ アシシタレシ、スツラ ミコトノ ミヨ

近江大津宮御宇天皇代

此標は既く一巻ふ出つ○天皇代の下、舊本等よ天命
 開別天皇や註し、古寫本よは謚曰天智天皇とも註せ
 里、共よ後人（に）志（さ）ざり
 ること、既く云るごとし

天白王賜鏡女王御歌一首

鏡女王（女王を、舊本に王女や作るは誤ハ、天武天皇紀
 今改免つ、下なるも同ト）

十二年秋七月己丑、天皇幸鏡姐王之家、訊病、庚寅、鏡
 姐王薨、諸陵式ふ、押坂墓（鏡女王、在大和國城上、
 郡押坂陵域内東南、など見
 ゆ、こは鎌足大臣妻なり、さてこは女王は、鏡王といふ
 人の女よ、額田女王の姉よ、ておはしけるなるべし、
 一巻ふ委、云るを考、合べし、興福寺縁起ふ、至於天命、開
 別天皇即位二年、歲次己巳、冬十月、内大臣枕席不安、嫡
 室鏡女王請曰、云云、見ゆ、これ鎌足大臣の妻なりし

證^シ明^ス皇^ノ事^ヲさるこの^ノ事^ト此^ノ女^王小^ノ天^皇此^ノ御^思を^レけ^サ
 セ給^ヒて左^ノ大^御歌^ヲを^レ給^ヘる^ルべし○御^歌は
 才^ホミ^ウタ^ヲ訓^申べし^シ御^ノ下^ノ製^ノ字^ノ脱^ノ多^クる^ル事^トい^ハふ
 中^ノに^ハ非^シい^ハづ^クな^ラば^モ御^ノ歌^ノと^ハみ^書さ^リけ^ルべ^シ庶^バ
 人^ノよ^ク作^ラせ^し書^キこ^ノろ^ニな^ラば^モ御^ノ製^ノと^ハ書^キこ^ノろ^ニな^ラば^モ
 集^中を^レこ^トと^ク共^ニに^ハ二^十四^五所^ヲ何^レも^ハ御^ノ製^ノ歌^ノ又^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 も^ハあ^リて^ハ此^ノ共^ニに^ハ二^十四^五所^ヲ何^レも^ハ御^ノ製^ノ歌^ノ又^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 よ^クあ^リて^ハ此^ノ共^ニに^ハ二^十四^五所^ヲ何^レも^ハ御^ノ製^ノ歌^ノ又^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 と^ハあ^リて^ハ此^ノ共^ニに^ハ二^十四^五所^ヲ何^レも^ハ御^ノ製^ノ歌^ノ又^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 九^十所^ヲ何^レも^ハ御^ノ製^ノ歌^ノ又^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 歌^ノや^ハこ^ノれ^ノよ^クあ^リて^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 の^ノけ^レぢ^ニあ^リて^ハ御^ノ製^ノと^ハみ
 の^ノを^レバ^ハお^しな^ハべ^シ御^ノ製^ノと^ハみ
 べ^シ御^ノ製^ノと^ハみ
 る^ル事^トは
 る^ル事^トは
 る^ル事^トは

妹^{イモ}之^ガ當^{アタリ}繼^{ツギ}而^テ毛^モ見^ミ武^ム爾^ム山^ニ跡^ヤ有^トナル。

大^{オホ}島^{シマノ}嶺^ノ爾^ニ家^{イハ}居^{ハラ}麻^マ之^シ乎^ヲ。

妹^{イモ}之^ガ當^{アタリ}ハ妹^{イモ}家^ノ邊^ノを^レ詔^スふ^ル事^トなり^シ舊^イ本^モ小^{アラ}妹^{イモ}之^ガ家^ノ毛^モ繼^{ツギ}而^テ

見^ミ麻^イ思^モ乎^ヲ云^フ云^フ家^ノ母^ノ有^リ猿^イ尾^モ也^{ナリ}何^レ里^ノか^クて^ハ麻^イ思^モ此^ノ辭^ヲ

重^イ依^イのみ^ニあ^リて^ハ家^ノ母^ノ有^リ猿^イ尾^モと^ハあ^リる^ル事^トい^ハふ^ル事^トなり^シ必^ズ

家^ノ居^{ハラ}麻^マ之^シ乎^ヲあ^リる^ル事^トな^リけ^レば^モ舊^イ本^モ小^{アラ}一^ニ云^フ

妹^{イモ}之^ガ當^{アタリ}繼^{ツギ}而^テ毛^モ見^ミ武^ム爾^ム一^ニ云^フ家^ノ居^{ハラ}麻^マ之^シ乎^ヲ註^シせ^ル事^ト今^ニ

是^レ全^ク用^フつ^ト繼^{ツギ}而^テ毛^モ見^ミ武^ム爾^ムハ^ハつ^トき^テも^モ見^ミむ^ル為^ニな^ル

御意なり○山跡有^{ヤトナル}有ハ在^{オホシマノチ}字^シ此意^シよて倭^シ在^シ在^シ在^シ
有集中通用^シ多^シ里○大島嶺ハ大和國平群郡^シよある^シ於^シ
るべし後紀^シハ大同三年九月戊戌幸神泉苑^シ有^シ勅^シ令^シ從^シ
五位下平群朝臣賀是麻呂^シ作和歌曰伊賀爾布久賀是^シ
爾阿禮婆可於保志萬乃乎波奈能須惠乎布岐牟須悲^シ
太留^シ々^シ阿^シり^シこ^シ於^シ保志萬^シも同處^シなる^シべしこの賀^シ是^シ
麻呂^シは本居平群郡^シよる^シ自住地^シの大島^シと我^シ名^シを^シよ
み入^シ多^シる^シを^シの^シ於^シる^シべし和名抄^シハ大和國平群郡額田^シ
多^シ加^シ郷^シ書^シ紀^シ雄^シ畧^シ天皇^シ卷^シハ倭國山邊^シ阿^シり^シて^シ此^シ程^シ此^シ女^シ
王^シは^シその額田^シ郷^シ大島^シよ住居^シ賜^シひ^シなら^シむ○家居^シ麻^シ

之乎^シハ家居^シしてを^シらま^シし物^シを^シ於^シ御意^シなり^シ以^シて家^シ
居^シしてを^シる^シことを^シ家居^シとい^シふ^シは古風^シなる^シ里○大御歌^シ
意^シは妹^シの家^シの阿^シ多^シり^シつ^シい^シきて見^シつ^シ阿^シる^シべき^シ為^シよ
大和の大島嶺^シよ家居^シしてを^シらま^シしものを^シ今^シは阿^シく
離^シき居^シて^シい^シや^シい戀^シき^シふ堪^シど^シなり^シ阿^シく鎌足^シ大臣^シ
ハ天智天皇八年^シとい^シふ^シよ薨^シ賜^シひ^シ多^シれ^シハ其^シ後^シハこ^シ於^シ
女王^シは^シ大和國^シよ歸^シ里^シて^シ本居^シよ居^シ玉^シひ^シ故^シよ大津宮^シ
よして^シか^シく^シハよ^シま^シせ^シ多^シま^シひつ^シら^シむ^シか^シく^シて四卷^シ十三^シ
よ額田王^シ思^シ近^シ江^シ天皇^シ作^シ歌^シあり^シて^シ其次^シよ鏡^シ女王^シの歌^シ
あれ^シハ^シその時^シハ右^シの大御歌^シを^シ賜^シせ^シ多^シる^シ後^シよ天皇^シ

の御心よよりく。京よ遷ましと知れり。かくて
 後、天武天皇の浄御原宮よ遷らせ賜ふほとも従ひく
 姉妹の女王ともようつ里住居ハれとおねえり。
 されば上よ引る如く、天武天皇の十二年といふよ、こ
 の女王の病をこそせ賜ひよ一の書紀よ見えり。
 ハ、京の家なればなり。さてその薨をも記されりハ。
 父天皇の御おねえの、あき
 めらざりしがゆゑなり

鏡女王奉和歌一首

歌の上よ、舊本阿野家本等よ、御字あるは例よ多々へ
 里なき水宜し、目錄ふもねきそよき。元々天皇と右皇
 子皇女の他よハ、御字を用ざる例なり。○舊本此間ふ
 鏡女王又曰額田姫王也と註せるは、最後人おねえ
 てよ註せること、決けきハ削去つ。鏡女王や

秋山之樹下隱逝水乃吾許曾

益目御念從者

樹下隱ハ。コ。ノ。シ。タ。ガ。ク。リ。ヤ。訓。べ。し。十。七。五。四。十。久。母。
 我久理古事記顯宗天皇大御歌。美夜麻賀久理。豆。な。
 ど。何。り。こ。れ。ら。よ。り。て。舊。本。よ。か。ク。レ。を。訓。る。は。何。り。
 き。○。逝。水。乃。逝。字。舊。本。遊。誤。今。は。元。こ。れ。ま。で。は。未。句。
 の。吾。許。曾。益。目。を。い。は。む。多。免。の。序。な。り。秋。を。こ。や。さ。ら。
 よ。水。の。増。き。バ。山。下。水。が。増。る。と。つ。い。き。あ。り。○。吾。許。曾。
 益。目。は。ア。コ。ソ。マ。サ。ラ。メ。と。訓。べ。し。○。御。念。從。者。ハ。オ。モ。
 ホ。サ。ム。ヨ。ハ。と。訓。べ。し。自。將。御。念。者。が。意。な。り。○。の。二。句。
 誤。人。皆。訓。○。歌。意。は。君。ハ。我。を。戀。く。お。わ。し。め。を。よ。つ。
 きて。大。島。嶺。よ。家。を。ら。ま。し。と。詔。へ。る。ハ。身。よ。取。て。忝。

くハあれど我君を念奉る心こそぞ

きよりはなほ増里多ら免と那り

内大臣藤原卿。娉鏡女王時。

鏡女王贈内大臣歌一首

藤原卿ハ。鎌足大臣なり。一巻よは。内大臣藤原朝臣と
 載多里。卿ハ。マ。ヘ。ツ。キ。ミ。を。訓。べ。し。欽明天皇紀。蘇我
 卿。ヤ。何。り。○。鏡。女。王。ハ。上。よ。云。る。如。く。遂。ふ。内。大。臣。の。嫡。
 室。ヤ。な。き。里。け。む。を。左。の。歌。よ。て。見。れ。バ。此。ほ。と。ハ。い。ま。

だ竊ふ通ひ住給しぬるべし。此は即位元年
前のこと、志ても、こゝは其歌を披誦しほせ
よよりて、この御代の標内よ載しものぬらむ。さて天
 皇即位八年よ、鎌足大臣に薨賜ひしぬるべし。其後大和
 國へは飯里住きしならむ。其ほや天皇に懸想させ賜
 ひて、右に妹之當云云の御贈答はありけむぬるべし。
岡部氏がこの女王。此時天皇の寵おとろへるを、鎌
足公のよむひ賜ひしといへきどいひ。此
女王を天皇の侍だうよ娶し賜ひしやいふことも見
えだ。そのうへ興福寺縁起よればはやく鎌足大臣
に娶ししや見かれば、この鎌足大臣の贈答の歌ハ
えふるをや。
 右の天皇の御贈答よりハ、前よ入べき順なれども、天
 皇を敬ひて上よ載さるう。又ハこの贈答の歌をバ、か

の御贈答よりハ後よ聞さる故よ、かく志るせるよも
 あらむ。のむありのことよハ、強て泥むべきよあらむ。
タマクシゲカヘルヲイナミアケテユカバキミガナ
玉匣覆乎安美。開而行者。君名
ハアレドアガナシラシモ
者雖有。吾名之惜毛。

タマクシゲ
 玉匣ハ枕詞なり。玉ハ美稱。匣ハ十九二十九丁よ、久之
宜とあるよよりて、宜
を濁る。梯笥なり。笥ハ下二十ふ。笥爾盛飯乎とある。笥
よて、猶そこよ。凡てかゝる器の稱なり。さてこに一句
 は句を隔て、第三句の開といふへ係きり。九卷よ玉匣

開卷惜十二よ玉匣將開明日十五ふ多麻久之氣安氣
互乎知欲利十八ふ多麻久之氣伊都之可安氣年古今
集ふ玉匣明ハ君の名立ぬべみなど開かきる例
多し○覆乎安美は安の上ふ不字を脱せるものよて
カヘルヲイナミを訓べしと細木瑞枝云里覆をカヘ
ルや訓ハ四卷五丁ふも覆者覆や何り不安美は俗よ
いやさよを云むが如しこは女此家を出て歸るが
否さにのよしぬり○開而行者而の下類聚抄よ者は
アケテユカバアケテイや訓べし夜明る後出て飯里
賜はバの意なり○君名者雖有云云ハ君ハ男ふませ

ハ御名お立むもあることせよはあれど女の身よして
人よ云ささるれむハ羞しくとびきわごとと云里
是そ女意のまことなるはるを畧解ふ君吾二字相誤
卷の吾名者も千名之五百名爾雖立君之名立者惜社
泣歌を引多れども彼歌ハ今空は意味かはまき
相證し多し又接よ六帖よ此歌を吾名ハ有ども君
の名惜もとあり人を先よして吾を後よるハ禮な
れハ實よ本ハ上ハ吾下ハ君なりけむを相誤れよ
やあらむと思ふ人もあるべし其ハ理よのみ○歌意
なづみて古のまことの心よはいよく遠し
は出て歸るが否さふを一夜明て後歸里給はハ人よ
見何らはさきてややくいひささるれむそのとた
君ハ男ふませハあることも有るならひなれば

さて何るべきを、それハ女の身ふり、名の立むはい
 と羞ヤサしきさざよ何らむや、それよよりて、又逢ふとき
 ことの出来もそまべられバ、行末長くと、我をおろし
 めし多まハど、別ハいと悲しけれど、あけどれの絵よ
 歸り給ひく、又こそ来よさめとなり、こハ鎌足、大臣の
 此、女王此許よ通ひ給ひく、餘りよ別を惜みて、夜更れ
 ども、飯里うてよ為給ふを、人目をはばりおとをし
 て、心ならぬど、強てごく返り給をぬと、とげまし催し
 や里もよふ
 なるべし

ウチノ オホニシキミ フヂハラノ ミツキミノ コタヘタヘル カミノ オホキミニ
 内大臣藤原卿報贈鏡女王

ウタ ヒトツ
 歌一首

贈字拾穂本

よはな

タマクシゲ ミム ロノヤマ ノ サ ナ カツラ サ 子
 玉匣將見圓山乃狹名葛佐不
 ズハ ツヒ ニ アリ カテ マ シ モ
 寐者遂爾有勝麻之目。

玉匣ハ身ミをカゝキる枕詞なり。笥類フタカケハ蓋懸籠身コと常
ふもいへり。そ能身ミなり。七卷ニ十フ珠匣タマコ見諸戸山ミ矣
ニ行レ之カ鹿齒カ面白オモシ四手シテ古昔イニシヘ所念オモヒ後撰集ニハ何けなオモがら年
ふることは玉ミくレげ身ミの徒ニよレあレバナりケ望ミこれ
ら皆身ミとつミどキ多クり○將見圓山ミ乃ハ山ノ下ノ類聚抄
文ハは岡部氏ノミムロノヤマノミとミるベるベ
り。ミムを將見ト書ルハ伊南ノを將行ト書ルと同じシ
し。ミムを岡部氏ノ説ト書ルハ圓ハ口ノの仮字ト用ルハ臣ヲ相ミ
をふレ麻ヲをレ用ルハ類ノ相ミ多クは下ノ言ヲ
用ルふレ云フハいハいハ臣ノ相ミ多クは下ノ言ヲ
言ヲよテ畧キいヘる例も多クし。是ハ本居氏上將
ろのミまヲ畧クやウ例ハ多クし。是ハ本居氏上將
見セいフむヤまヤ通音なる故トおノづラみマる

や云やうミもヒいクから圓字ヲ書ルなりやいへる
が如し。ゆテ此ハ大和ハ三室山ナり。舊本ハ或本ハ歌云。
玉匣ハ三室戸山ノ乃ハ註セる戸字ハ之ハ乃ハ字ノ誤ナる
べし。七卷ハ見諸戸山ノ有ルハ旅ノ歌ハ中ニありて西
ノ事ヲ見ユこハ大和ノ都ト備中國ハみムるド
後ノ事ヲ見ユこハ大和ノ都ト備中國ハみムるド
をよビむキよアらハ古所ニ由リて他國ハ地名ヲ
設ケよムことナきコなレハありト畧解ハいへり
○狹名葛ハ狹字ハ舊本ハ狹ハ誤ニ今ハ古ハ集中ハ狹葛トも
狹根葛トもアるハ同ジ元テ禰ハ那ハ殊ハ親ト通ハ
し云り。名義ハ狹名ハ狹根ハ狹ハ例ノ真ト通フ
辞ハ萎葛ナり。子ハエハ切ハこの葛ハあるガ中ハも萎トし

萬葉古義二上

五

あるもの形れば、志の名おへるなり。十四二十五十ふ乎ラ
可爾カニヨセ與世セワ和我ガカル可流ルカ加夜ヤノ能佐サチ禰カヤ加夜ノ能麻ニ許コト等ナ奈其夜ガヤ
波禰ハチロト呂等ヘナ敝奈香母カモとよ免るも、真サ萎草ナエカヤの義ふして、佐サ
禰チの言は今々全同ト。又同卷ト。宇奈波良乃根夜波ウナハラノチヤハ
良古須氣ラコスゲと何るも、萎ナエ和子管ワコカンの義形里ニ。此コを契沖は海ウチノ
ハ潮ふあひて、根ネの和らぬるをいふやいひ、畧解リョクゲふ。
催馬樂サヒマツふ貫川のせ、乃ノやハら手枕テマクと云やハらハ泥ニ
の事を云と見ゆきハ今イマもやハらハ泥ニよる、其泥ニふ生ナ
多オホる管カンなきバ、寢和子管ネワコカンと云イハなして、うウるはハ一ヒトきキやハ
ハだの妹イモをそへ多オホる可コを云イハるも、又マタ葺ナも、萎ナエ繩ヒ
何ナニ多オホらズ猶ナ彼處カノよハいハむキをシ併ヒ考カへテよ。又マタ葺ナも、萎ナエ繩ヒ
のよしぬるべし。又マタ通ツふ言コト。又マタ復草フククサ之ノをシて、野島ノノまタ多オホ
阿比泥アヒニ能波麻ネハマやいふよついでけ多オホるも、夏草ナツクサ之ノ萎ナエやカ

かきるあて、夏ナツ鞆ツツ之ノ萎ナエ藪ヤブ禰ニとつツ禰チの言ひとし。又拾遺
集ふ猿澤の池ふ、采女サメメの身を投多オウるを見、吾妹子ミメコが
ぬくぬれぬみミを猿澤サマ池イ乃玉藻ノタマモをシ見るミそ悲カナしきキや
何ナニるルをシはシて、ぬくぬれ髪カミといへること此コト。後々多オホ
たも、皆ナニ萎腐ナエク髪カミの義ニなるべし。寢腐ネクの義ニは、狹カ根ネの名
と根ネハ、奴ヌの言コト比轉ヒテンふル。奴ヌハ、此コトの葛カハ滑カらハけキ
汁シのあれバいハふハぬル。と滑カらハなルよシなり
猶ナ考カべし。猶ナこの葛カの事、品物シモノ解トよシ云イへし。此コトま
では、佐寐サメをシ云イむ料リョウの序シなり。大和物語オホヤマトモ、歌ウタふ、春ハルの野ノふ
緑キナふをへるさねあづら吾君ミケさねを多オホるむいハのよそ
と何ナニるも同じナニ。佐サ不寐フメ者モノ遂爾スエニハ、相寢サニせバてハ遂スエ

一の意なり。佐寐ハ本居氏。凡て寐るを。佐寐と云ハ真
 寐ふく。多く男女率く寐る哉云。古事記景行天皇條
 倭建命御歌。佐泥牟登波阿禮波意母閑村。允恭天皇
 條。輕太子御歌。宇流波斯登佐泥斯佐泥豆婆。此下
 丁。左宿夜者幾毛不有延都多乃別之來者。三卷六十
 丁。吾妹子跡左宿之妻屋爾。十四丁。佐奴良久波多麻
 乃緒婆可里。など。於ほ多き。の。ご。とし。い。へり。但十五
 丁。保久伊波受母射良奈久爾。又三十五丁。左奴流能伊家
 於。保久伊波受母射良奈久爾。又三十五丁。左奴流能伊家
 伎。母能乎。安禮村。も。母能。波受。夜須。久奴。流。波。佐。祢。奈。有
 有勝麻之目ハ。有ふ得堪ざらましもの。を。此。意。あ
 〇

加豆ハ志の何らむを思ふこそ。の。得。堪。ぞ。して。志。の。
 難きをいふ辞なり。本居氏。勝ハ消難。行難。あ。どの。難
 〇。同。く。て。難。き。意。なり。又。加。豆。と。云。も。通。ひ。く。聞。ゆ。三。卷
 〇。別。不。勝。鶴。この。加。泥。ふ。不。勝。を。書。ると。加。豆。も。多。く
 〇。同。字。を。書。る。を。思。ふ。べ。し。〇。云。里。凡。そ。加。豆。加。泥。加。多
 〇。久。ハ。皆。其。意。通。へ。る。事。なり。大。和。物。語。よ。吾。心。あ。ぐ。さ。免
 〇。月。を。見。て。云。く。あ。ぐ。さ。免。の。多。し。は。是。が。よ。し。あ。む
 〇。云。と。と。云。り。是。正。し。く。か。ね。を。か。さ。く。と。釋。と。る。あ。り。
 〇。な。り。下。よ。云。べ。し。本。居。氏。又。云。加。豆。を。不。勝。と。書。る。は。あ
 〇。ぬ。ハ。難。き。と。同。意。な。れ。ハ。あ。り。然。る。を。其。不。字。を。省。き。て。
 〇。勝。ハ。難。の。難。書。る。は。大。寸。御。門。入。不。勝。鴨。又。宿。不。難。爾。あ。ど。後
 〇。心。乎。知。加。豆。奴。鴨。ハ。加。豆。の。御。門。入。不。勝。鴨。又。宿。不。難。爾。あ。ど。後
 〇。何。る。加。豆。奴。鴨。ハ。加。豆。の。御。門。入。不。勝。鴨。又。宿。不。難。爾。あ。ど。後

萬葉古義二上

三

里さる其字も加豆も不勝を書るふ又加豆も
不勝と書れバ不勝を勝のみに書るも所以何る小や
又宿不難爾をあるハ言も字も宿が多のらぬや云こ
とふ聞ゆきども猶いねかてと同くていねの多き意
なりされバ是も不字何ると四卷十四よ妹爾戀乍宿
無空同意も落るりと云りモ有勝益士十一三三ふ戀
不勝家牟又九丁此月期呂毛有勝益士十一三三ふ戀
乃増者在勝申目十四九よ須宜可提爾伊伎豆久伎美
乎廿卷四三よ伊湫多知加豆爾又七丁和可禮加豆爾
等比伎等騰米崇神天皇紀歌ふ多誤辭珥固佐麼固辭
介氏務介茂我豆とは非我をこれらの加豆ハ難き意よて
皆同じこの加豆ふ不勝を書るは水居氏説る如く多
へぞといふ意を取るなり。四卷五十二丁ふ戀ニ不勝

やのみ書るハ不字を畧き多る如見ゆきどもよく思
へば勝のかつの訓を轉用するものよて畧けるよ何
らむもとより理異なり思紛ふべのらむ。されハ加豆
も勝をも書れども加泥よハ不勝と書て勝とのみ書
る例なきふて勝ハ不勝の不字を省きするよハあら
む固理異あ五卷七丁ふ比等國爾須疑加豆奴可母十
四丁ふ遊吉須宜可提奴伊毛賀伊敞乃安多里十九
三丁ふ落雪之千重爾積許曾我立可互禰廿卷二十よ
道乃長道波由伎加豆奴加毛こきは此下ふ知勝奴
鴨入不勝鴨ふどあるよ同じく加豆の反對ふて加豆
奴は不不勝といふこをふ聞ゆきどもつらく思へ

奴ハ不字の意よ何らむ己成オチ井の奴ヌふて鳥毛トリモ来鳴キナキ奴ヌな
どいふ奴ヌふ同じさキて加互カテヌ奴ヌハ加禰カチツ都ツよ通ひキる行過キスギ

加互カテヌ奴ヌハ行過キスギ加禰カチツ都ツといふ意ふ通ひキる聞ゆキる其餘キヨ

も此定コトをキて准スふるふ集中シウジュウひとつも疑ウタガハシふキこをキねシ

但常ツネニ怪オドロクるキこトならぬ意イ云クことト何ナニも其ソノハ怪オドロクすキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

尋ミねテ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

もトいフ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

吉キチ須ス宜イ可カ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

ハチ協キョウ爾ニ布フ路ロ可カ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

疑ウタガハシひキ思オモふキ人ヒトのノ心ココロもトいフ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

可カ知チ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

成ナリ連レン也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

已マデ成ナリ連レン也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

丁テイ意イ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

ふフ意イ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

以モ同ドウ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

以モ同ドウ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

以モ同ドウ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

萬葉古義二上

三九

ハチ協キョウ爾ニ布フ路ロ可カ也ヤ加カハチ奴ヌハチとルそノ云ク反サカ対ツク意イ云クなニ加カせバこノ加カテヌもキ其ソノ定サマシまシほク怪オドロクてキ

なきは、大の多ふ意得居多^レ至^レふや。其中^ニ上^ニ云^ハる
 委^キよ似^トきど。なほ加^カ互^カや加^カ互^カ如^クのゆゑよし。又
 不^レ勝^トと書^トと勝^トと書^トとよは。うはしく差別^{アリ}ること
 きまぐ。思^ハはざ^レ至^レふよりて。まぎらはしきこと。目^ハ
 多^シし。又宿^ヲ不^レ難^クルやいふ言^ハ。後^ニ委^スしく云^ベし。目^ハ
 助^辞あり。拾^穂本^ニ。異^本よ乎^ヤあるより。云^至乎^トと云
 の多^ク今^少しおけりてきこゆ。○歌^意は。夜^明て歸^らば
 人^ノ見^テ名^を立^なむ。早^かへせと。その諫^めらるる
 よまうせて。明^をてぬ間^よ。出^テ行^べきなれど。相^宿を
 こそり。遂^よかへるふ。得^堪ざらましものをもとけり
 うちノオホマツキミ。フヂ。ハラノ。マツキミ。エタル。ヤチ。ヤス。ミ

内大臣藤原卿娶采女安見

兒時作歌一首

娶^ハは。ヨバ。ヘル。ま多^ア。ヘル。などもよむべけきども。
 氏^ガ。メト。セル。ヤ。よ。歌^詞ふよ至^テ。こしはエタル。や訓
 める。はい。い。なり。つ○采^女は。書^紀孝^德天^皇。卷^ふ。凡^采女^者。貢^郡少^領以
 上^{。姉}妹^及子^女。形^容端^正者^{。從}女^一人^{。以}一^百戸^{。宛}采^女
 一人^{。粮}庸^布庸^采。皆^准次^丁。後^宮職^貢令^ふ。凡^諸氏^氏別。
 云^云。其^貢采^女者^{。郡}少^領以上^{。姉}妹^及女^{。形}容^端正^者。皆
 申^中務^省。奏^聞など見^ゆ。さて采^女てふものしものふ
 見^えそめ多^るは。書^紀仁^德天^皇四^十年^ふ。采^女磐^坂媛

てふ是れ也。采女の字は後漢書皇后紀ふ入掖庭為采女。有て註ふ。采擇也。以因采擇而立名と見へる。本居氏采女の字襍辨を訓べし。辨の部の意なり。女の意ふは、何らむ。字襍辨と云名。字那宜辨の切里とるなり。字那宜の物を項ふ掛るを云。采女の主を御饌より奉るこのふ。項ふ領巾を掛る故。嬰部とはいふ。形り大被詞ふ比禮挂伴男と何るも。主を采女あやを云り。字師も云れ多るが如しと云り。○安見兒の采女の字

アハモヤマスミコエタリヒトミナノ
 エカテニストフヤスミコエタリ
 吾者毛也。安見兒得有。皆人乃。
 得難爾為云。安見兒衣多利。

アハモヤハ古事記上卷須勢理毘賣御歌。阿波母與賣。通斯阿禮波と何るふよりて訓つ。毛也は毛與といふ。よ全同しく助辞なり。既く委く。○安見兒得有といふ。安見兒の名あがらこゝの容易く得る意を帶多る。悦て少し誇る意あり。得難爾為云を何るふ。應へるふ。とも考べし。古事記應神天皇條。汝得此嬢子乎。答曰

易得也ヤスクエテムトとあり。をべて女を娶を得るをいふは古言なり。伊勢物語よも男ハ此女をこそ得めと思ひ。女も此男をこそを思ひつゝ云云。昔男五條ことりなりける女を得ゝを成まける事と。こびりける人の云々。あり。後撰集よ。得難かまける女を思ひあけてつゝはしける云々。大和物語よ。その多だみぬが女ありと聞て。ある人なむ得むをいひけるを云云。故右京のかみ人のむき免を志のひく得ありけるを云云。竹取物語ふ。いづこの加久耶姫カクヤを得てしが。見てしが。女音カクヤふカクヤき。めカクヤでカクヤまカクヤざカクヤふカクヤなどある皆同じ。皆人乃は人

皆乃を何里しを。下上ふ誤まるな里。かれヒトミナノ。空訓つ。おは皆人なも。人皆をいふべき事。誰も下わさりは。おもひをる事。れども。熟考るに。元て皆を。ふ言は。某皆々のみ云て。皆某をいはむ。ハ。古語ハ體ふ。阿らず。那む。かれ集中の例を檢る。ふ。五卷二十。比等二十。未奈能美良武麻都良能云云。十四十一。ふ。比等二十。未奈能美良武麻都良能云云。十四十一。ふ。比等二十。許等波多由登毛云云。こもらハ假字書なま。又此下十六。ふ。人皆者今波長跡云云。五卷三十。ふ。人皆可吾耳十六。也之可流云云。六卷十三。ふ。人皆乃壽毛吾母云云。又十四。人皆之念息而云云。九卷十七。ふ。人乃皆十六。上誤。如カ

萬葉古義二上

主

是迷有者云云十卷三十五人皆者芽子乎秋云云十
 一ふ二とこる十一人皆知云云又二十世人皆乃云
 云又二十里人皆爾云云十二二人皆如去見耶云云
 又二十人皆之舊本皆人之よ誤今笠爾縫云云又十
 卷十二物皆者新吉云云古事記ふ國土皆震云云高
 天原皆暗卷上國皆貧窮卷下書記竟宴歌ふ俱娑幾微儼舉
 都夜謎豫斗底あどある例なるを唯四卷三宿與殿二十金者
 七卷十一師字能花あど何る皆人野八卷二十五人皆と何
 之待師字能花あど何る皆人野八卷二十五人皆と何
 の顛倒いせ多あること上よもいへるごとくなるを
 考て今までこの論せ一人のなる里一のいふそや

但し古今集よりこなとのよはいづきも皆人やよみ
 多れどもそのまづおきて今の古きよつきていふの
 〇安見兒衣多利の反覆いひるその深切くよろこ
 べる意むあらはし給へるなり〇

歌意はかくきある空ころなり

久采禪師。娉石川郎女時歌

五首

久采禪師の傳詳ならぬ久采の氏禪師の名なり俗人
 よしてかゝる名をつけしこと當昔のはやまことな

るべし。續紀ふ。阿彌陀釋迦耶といふ名も有し。禁^トる
らきしこと見え多^シ。石川郎女。これも傳^トる。里^ノがと
し。郎女ハイラツメと訓べし。既^レく古義^一卷
下^ニ出^ル

云つ○時の下。拾穗本よハ。贈答の二字あり

水薦^{マモカル}苜^{シナヌ}。信濃^{マモ}乃真^{マモ}弓。吾引者。宇

真人^{マモ}佐備^{ヒトサ}而。不欲^{マモ}常^{マモ}將^{マモ}言^{マモ}可^{マモ}聞^{マモ}。

禪師

水薦^{マモカル}苜^{シナヌ}。字類聚抄よハ。前。拾穗本よハ。枕詞なり。水薦

ハ。水ハ借字^{マモ}。ふて。真薦^{マモ}と云よ。同じ。草^{マモ}を^{マモ}も。真草^{マモ}とも美

草^{マモ}也。集中^{マモ}ふよめる類^{マモ}なり。十一^{マモ}ふ。真薦^{マモ}苜^{マモ}大野川原

之^{マモ}。云云^{マモ}。何^{マモ}里^{マモ}。さて信濃^{マモ}ハ。國名^{マモ}の由来^{マモ}は。級^{マモ}阿^{マモ}る野^{マモ}也

云^{マモ}なるべ^{マモ}け^{マモ}き^{マモ}ど^{マモ}も。枕詞^{マモ}より^{マモ}の^{マモ}か^{マモ}。里^{マモ}は。裏沼^{マモ}と^{マモ}う^{マモ}け

ある^{マモ}なるべ^{マモ}し。シナ^{マモ}ハ。書紀^{マモ}ふ。匿^{マモ}字^{マモ}を^{マモ}シナ^{マモ}ス。と^{マモ}訓^{マモ}と^{マモ}る。

シナ^{マモ}と^{マモ}同^{マモ}言^{マモ}よ^{マモ}し。シタ^{マモ}也。相^{マモ}通^{マモ}へ^{マモ}り。さて^{マモ}その^{マモ}シタ^{マモ}ハ。

集中^{マモ}よ。隱沼^{マモ}の^{マモ}志^{マモ}と^{マモ}ふ^{マモ}通^{マモ}ふ^{マモ}と^{マモ}も。隱沼^{マモ}此^{マモ}志^{マモ}と^{マモ}ゆ^{マモ}戀^{マモ}ると

も^{マモ}よ^{マモ}ぬ^{マモ}。又^{マモ}心^{マモ}も^{マモ}志^{マモ}ぬ^{マモ}よ^{マモ}古^{マモ}所^{マモ}念^{マモ}な^{マモ}や^{マモ}云^{マモ}シ^{マモ}ヌ^{マモ}も^{マモ}通^{マモ}ひ^{マモ}て。隱

里^{マモ}か^{マモ}なる^{マモ}を^{マモ}云^{マモ}言^{マモ}ぬ^{マモ}き^{マモ}ハ。裏沼^{マモ}ハ。隱沼^{マモ}と^{マモ}云^{マモ}よ^{マモ}全^{マモ}同^{マモ}ト^{マモ}。

れハ真薦マコモを苧裏沼カルシナヌといふ意よついでけしるなり冠辞考ふ
 薦字を篤ツク改えて、シ。ス。ッ。カ。ル。を訓しハ甚謾シヤクならむ
 や、驚オドロクを御驚ミオドロクやも真薦マコモやも云しる例なきよて、其非シヤクな
 るを知チル ○信濃シナノ乃真弓マユミは古もはら甲斐信濃の國此名ヨキ
 物モノふそ何りつらむ故かくいへる那るべし續紀シヨキハ大
 寶二年三月甲午信濃國獻梓弓一千二十張以充太宰
 府景雲元年四月庚午以信濃國獻弓一千四百張充太
 宰府延喜式ニハ凡甲斐信濃兩國所進祈年祭料雜弓百
 八十張甲斐國規弓八十張並十二月以前差使進上な
 ぞ見えしりさて此まづハ引ヒキをいはむ料の序なり○
 宇真人ウマヒト佐備サベ而シテは良人ウマヒトめきてと云が如し宇真人ウマヒトハ

可美人ウマヒトの義よて高貴タカカ人ヒトを云五卷二十ハ美流ミル爾之ニシ
 良延ラエ奴ヌ有麻マ必等ヒト能古ノコ等ト神功皇后紀シヨクハ宇摩ウマ比等ヒト破ハ宇ウ
 摩マ譬ヒト昔ト奴ヌ知野チヤ伊徒イツ姑播コハ茂伊徒イツ姑奴コド池チ云云仁德天皇
 紀シヨクハ于磨ウマ臂ヒト昔ト能多ノタ菟ツル屢ル虚コト等ト太タ臣シ又書紀シヨクハ君子キニシ播ハ紳シ
 顯宗キョウシュウ天テン良家ラウカ欽明天皇卷あとの字をウマヒトとよめ皇佐ミコサ
 備ビハ神佐備カミサベの佐備サベハ同じゆて此詞コトバは自ミそのふるま
 ひをなれをいふことハあるそもく言意コトバは然シカふるま
 りシの切キレびビふるまは荒アラふるま和ニキふるま都ミヤコふるま鄙シヤクふるま俗シヨク
 ふも利口リクコふるまといふ夫流フルなりこれよて貴人ウマヒト佐備サベ
 は貴人ウマヒトやしてやがて然シカふるまをける意コトバ神佐備カミサベハ神

空阿りてやめて然るふ里を在る意よて。今世某めく
 と云ふ近し。これよ素行らへく。ほべく某佐備といふ
 言意をゆとるべし。○不欲常將言可聞欲字舊本よハ
飛鳥井本元曆本類聚抄拾穂本等よ從つ古寫本ふ知
と作るもいひなり。不知不言よてハ。イナ字訓むこ
ぞおろつらぬけれハなり。故按よ言ハ許字の畫の脱
しものうハ卷四十九丁よ神佐夫等不許者不有とあ
り。又思ふよ許字の省作よてハ。阿らむら。十卷六十丁
よは。許多を言多と書里。猶考べし。知ハ欲字の誤寫ぬ
るべハ。嗚呼否といひて。うけひらぬ阿らむらといふ
なり。可ハ疑辭聞ハ歎息。辞あり。○歌意ハ。この心よせ
ハ阿らぬらぬども。引いざなはハ。郎女ハ。うま人な
れハ。やめてそのうま人めきて。我をハ。適配ふあらぬ

空て。嗚呼否といひてうけ引を阿らむらとなり。禪師
 が身を謙里て。郎女をあがえいへるな里。此方より如
 此人の心を量、ういふハ。不許といをせじとの心よま
 へなり。後拾遺集よ。志ひてよもいふよもよらじみこ
 もある志なのしまゆみひらぬ
 心の全此歌を取てよおれり
ミ
コモ
カル
シナ
ヌ
ノ
マ
ユミ
ヒ
カズ
シ
テ

三薦苜。信濃乃真弓。不引爲而。
ヲ
ハク
ル
ワ
ガ
ヲ
シル
ト
イ
ハ
ナ
ク
ニ
 弦作留行事乎。知跡言莫君二。
ニ

郎女

弦ヲハクル作ワザ留ヲ行ヲ事ヲ乎ヲ。誤弦字字。舊本。今改つ。強類聚抄。濕作。是共よ
佐と作る。弦ハ次フ都ラ良ヲ。結ハ也ハ。何る。即チ是よて。弓ハ弦のこ
も誤なり。作ハ留ハは。波ハ久クは。佩ハ刀ハ著ハ履ハ。即チ是よて。弓ハ弦のこ
をなり。作ハ留ハは。波ハ久クは。佩ハ刀ハ著ハ履ハ。即チ是よて。弓ハ弦のこ
著るを。いへり。さて。刀履。あど。は。自ら身よ著る。故常ふ
波ハ久ク。いふ。なる。を。弦ハは。弓よ。令シ著ル。ゆ。ゑ。よ。波ハ久ク。留ル。と。も
波ハ氣ケ。や。も。云レ。され。バ。波ハ久ク。や。波ハ久ク。留ル。と。は。言ハは。一ッ。あ。き。ど
も。自他の。差ケ別ノ。あ。る。六を。な。り。古事記倭建命御歌。よ。比
登ト都ツ麻マ都ツ比ヒ登ト爾ニ阿ア理リ勢セ波バ多タ知チ波ハ氣ケ麻マ斯シ表ヲと。あ。る。は。

即チ令シ佩ハ刀ハ。ま。し。を。や。云ル。ふ。て。波ハ氣ケと。此多ま。へ。る。な。り。
是ふて。も。波ハ久クと。同言なる。を。お。も。ひ。明ラむ。べ。し。さ。る。よ
あ。ら。ず。て。弦ハな。ど。よ。ハ。波ハ具グ留ル。波ハ宜グ。あ。ど。具グ宜グ。を。濁レ。て。
刀履。な。ど。を。波ハ久クと。云フ。ハ。異言。あ。り。と。意得。さ。る。ハ。い
み。し。き。ひ。が。集中。小も。次ふ。梓ハ弓ハ都ラ良ヲ。絃ハ取リ。波ハ氣ケ。十四。十六
こ。を。あ。り。集中。小も。次ふ。梓ハ弓ハ都ラ良ヲ。絃ハ取リ。波ハ氣ケ。十四。十六
丁ふ。美ミ知チ乃ノ久ク能ノ安ア太タ多ダ。良ラ末マ由ユ美ミ云フ。都ツ良ラ波ハ可カ馬マ可カ
毛モ。十六。一三。丁十。よ。牛シ爾ニ已コ曾ソ鼻ハ繩ハ波ハ久ク例レ。あ。ど。何り。假字書
も。清音の。可久氣行事ハ字の如し。俗よ為道為様。あ
等字を。の。み。用レ。里行事ハ字の如し。俗よ為道為様。あ
ど。云フ。ご。と。し。四卷。九十。ふ。風流。無三。吾為類和射乎害が
目ノ賜ヲ名ヲを。何り。○知シ跡ト言ハ莫ク君ニ。君ノ字類聚抄。よ。は。な。し。
り。知ルと。不言。よ。の。伸直。さ。る。よ。て。切ハ知トい。を。ぬ

萬葉古義二上

三

ことなるをと云が如し。○歌意ハ弓をバ引がる免よ
こそ弦著る行事をも知をいふ所き引ぬ弓よ弦をけ
て何よりせむ其如く我をい討あふやハなくて打つ
けよわが否といはむも諾やいはむもはの里知べき
よあらざるをややなり戀しき心よ堪をりて逢むと
ハいとせりて良人めきてうけひのどろといつむ君
が方よよらむと云べき

由なしとの下心なり

梓弓引者隨意依目友後心乎。

知勝奴鴨。郎女

引者隨意は引バ引むましよ此意なり。○知勝奴鴨ハ
知難ぬる哉の意なり鴨は歎息詞よて後世の哉をい
ふよ同ドの歌意ハ實よ我を引いざなふとならバ引
のまゝに志とらひまむを今より後行は急のやを
やつゝなしやあり右の歌の下心をいひ

顯し行末をあやふむ意をのべし

梓弓都良絃取波氣引人者後

心乎。知人曾引。禪師

都良絃取波氣ハ弓弦を取テ令佩といふなり都良は
 連なり連續意なり。強ハ弓の本より未
 の詞よ草の蔓を其餘器物のつる形をいふも皆ひと
 つ形り都良十四よ右ふ引如く都良と阿れが古ハ
 大御歌都留也由豆流又此下ふ弓弦葉名抄よ強由
 美都流絃も續綿ゆる意の稱なり年緒生緒などいへ
 るふて志るべし。歌意ハかふあく心をつくして人
 を引誘ふ人は行末いつまでも變らぬ心を思ひ定ま

東人之。荷向蓮乃。荷之緒爾毛。
 妹情爾衆爾家留香聞。禪師

東人之はアヅマヒトノ。六言よ訓べし。アヅマドと
 後の音便なり其ハ音便よアヅマドと云るを又後
 小其ハを省きてアヅマドと云るよ。ハを省きてもな
 不ハをそへるとアヅマドと云るよ。ハを濁してトを濁して唱る
 なり。九て音便の下の清音なるをのみな濁る例
 だ。なれハなり。商人をアキンド。旅人をカピンド。音便よ云。

てこそ引さるおやつあな
 きこせあらむやいとね里

萬葉古義二上

五

和名抄に丹波國郷名に川人加波無止備中國郷名と
間人万無止かて和名抄大須本阿豆末無豆とありしを無
ことなりかくて和名抄の頃省きて唱へしよも何
東人二字とあるなり其の省きて唱へしよも何
字を後脱せるなり又の歌ひなへさそむあづま
るべし袖中抄の載る歌ひなへさそむあづま
づもがなとあるなり後なれど證とせよとらざさて
いふがなとあるなり後なれど證とせよとらざさて
後訛れりものよて古の正しき稱よ何らぞかく
て等を豆を轉せるは後藏人をクラウツといふ類
よてこれ中山嚴水荷前は國々より奉る中ふ中國北
も訛なり中山嚴水荷前は國々より奉る中ふ中國北
國四國西國は皆船よて難波ふつき又夫より船よて
大和まづも持はこび行を東國よはみな馬ふておび
いふきよで多く引ついくれバ殊ふ東人の云云と
はいへるあるべしといへ里これ是れるふ近一氏考部

よいづこはあきど東の調をいふは御代のちど先西
の國こまつろひて東の國この平らぎしハ後なるふ
遂に東までも貢奉るを悦び賜ひて神宮陵墓へも奉
里初免賜ひより例あらむから國の貢物を先
神宮まどへ奉里賜ふ也同じ意なるべしといへまぜ
こしはさるこいろをよておもひるいふべきところ
よあ○荷向篋乃篋字なりもべてしをまぜ作こ
らバ○荷向篋乃篋字なりもべてしをまぜ作こ
字書よ見えて首卷よ云里古馬本拾穂本荷向ハ何れ
等よハ篋や作里類聚抄よは篋や作里荷向ハ何れ
の國ふまき年ごやふ當年はし免てあせる絹布を先
やして木綿麻山海の物までも公へ調貢るをいふこ
とふく荷前ハ荷の初といふ謂なるべし江家次第よ
國進御調荷前延喜式祈年祭祀詞よ荷前者皇大御神
取奉故曰荷前能太前尔如横山打積置氏云云大神宮九月神嘗祭よ

調荷前絹一百十三尺一丈二尺云云。絲綿布木綿麻腊
熬海鼠堅魚腹鹽油海藻已上諸國封戸調荷前と見え
多り荷を能とよむは木を許火を保やいふ類ふく下
へ連く時よ第二位の言を第五位の言ふ轉しいふ例
なり神功皇后紀よ肥前國の荷持田村を荷持此云能
登利とあり○荷之緒爾毛緒字舊本結よ誤れ類こ
れよでは乘といはむ料の序ありさるは荷前を陸路
より奉るふは篋よ納え緒もて馬よつけ乘はるが故
なり前よ引る祝詞よ。荷前者云云自陸往道者荷緒
縛堅豆とあり○妹情爾はイモガコ、ロニヤ訓べし。

イモハと訓はバの我が心ふ妹が乘なり必我といふ
言おだやのぬらむ。我の心ふ妹が乘なり必我といふ
べき語例な里々本居氏云里○衆爾家留香聞香字古
家と作るハ誤なり家字をか。假は妹が容儀此常よ
字よ用多ること集中小例なし。は妹が容儀此常よ
吾心のうへふうかべる哉とな里四卷四十五百磯城
ノオホミヤヒトハオホカレドモロニリテオホモルイモ
之大官人者雖多有情爾衆而所念妹十卷十三春去
シガルヤキトヲニモイモガモロニケルカモ
為岳柳十緒妹心衆在鴨十一ハ小是川瀬二敷浪布々
妹心衆在鴨又ハ丁驛路爾引舟渡直衆爾妹情爾衆來
鴨十二三十七射去為海部之楫音湯鞍于妹心衆來鴨
十四八十二思良久毛能多要爾之伊毛乎阿是西呂等
許已呂爾能里氏許已婆可那之家伊勢集よ面うげハ

水よりきても見えびやハ心よ衆てあがれしものを
 後撰集よ秋霧の立野の駒を引時ハ心よ衆て君そ戀
 しきなど何り〇歌意ハ女の容儀ハ常ハ吾心のうへ
 ふうろびそ忘るしひまのあきことふも有哉やなり
 さて此一首ハ岡部氏も云し如く郎女ハ贈る意とはきこへず禪師が獨思
 ふよしなれど別は題詞のあらどその思ふ心中を
 右の歌よそへて郎女よ告知
 せむとめよ贈れるなるべし

オホ トモノ スク 子ノ ツマドウ コ セノ イラ ツソヲ トキノ ウタ

大伴宿禰。娉巨勢郎女時歌

一首

大伴宿禰ハ安麻呂卿なり大納言兼大將軍よまでの
 ぼられけきハ名をバ書さびをもべく大納言以上の人
 ハ名を諱て書さる此集の例なること首卷よ云と
 るが如し但し此時ハ安麻呂卿いさゞ微官よてあり
 しほとなれど家持卿の父ハ旅人卿祖父ハ安麻呂卿
 大小父ハ御行卿よてありなれバ此等の人々をバ微
 官よてありしとのことをも家持卿よりよふとみ
 て名を除かれしなり書紀天武天皇卷よ元年六月巳

丑遣大伴連安麻呂云云等於不破宮令奏事狀十三年
二月庚辰遣云云小錦中大伴連安麻呂等於畿内令視
占應都之地朱鳥元年春正月是月為饗新羅金智淨遣
云云大伴宿禰安麻呂云云等於筑紫九月乙丑諸僧尼
亦哭於殯庭云云直廣參大伴宿禰安麻呂誅大蔵事續
紀小文武天皇大寶元年三月甲午始依新令改制官名
位号云云直大壹大伴宿禰安麻呂授正從三位二年正
月乙酉以從三位大伴宿禰安麻呂為式部卿五月丁亥
令參議朝政六月庚甲為兵部卿慶雲二年八月戊午為
大納言十一月甲辰為兼太宰帥元明天皇和銅元年三

月丙午正三位大伴宿禰安麻呂為大納言既く慶雲二
年大納言
之為賜へ
りいゝ七年五月丁亥朔大納言兼大將軍正三位大
伴宿禰安麻呂薨帝深悼之詔贈從二位安麻呂難波朝
右大臣大紫長德之第六子也○元曆本官本等又大伴
宿禰諱曰安麻呂也難波朝右大臣大紫大伴長德卿之
第六子平城朝任大納言兼大將軍薨也之註せり○巨
勢郎女の傳り
次小云べし

タマ カツラ ミ ナラヌ キ ニ ハ ナ ヤブル カミ
玉葛實不成樹爾波千磐破神

曾著常云。不成樹別爾。

玉葛ハ實の成ものなるゆゑよ。次の句をいはむ料よ
いへるなり。實の成てふまでよかゞ里て。不成の不成
ごのかけて見べのらば。布留の早田れ穂ふは出むな
ど云類形玉葛のことハ。品物解よ云り。○實不成樹
爾波ハ。何れ樹ふまれ。實のねらぬ樹なり。其樹を定里
多ることにはある。上の玉葛は別なる。混べのらば。爾
波ハ。他の樹ふむらへていふ辞なり。○千磐破ハ。神の
枕詞なり。集中ことよ多し。まづこの言ハ。古事記よ。此

葦原中國者云云。故以為於此國道速振荒振國神等之
多。在云云。書紀よ。慮有殘賊強暴横惡之神者云云。など
見えり。この詞を冠辞考よ。知ハ。伊知の畧よ。て。伊知
く疾を云。夫流ハ。辞なり。且波ハ。言便ふて。和の如く唱
るなり。や云。るハ。非なる。まづ伊知の伊を省く。如きこ
やハ。上古の言よ。有こや。形。さて又波を和のごとく
唱ふや云。るも。まづ波ハ。論なり。元て上古ハ。音を正
しく唱へし。こや。なれ。バ。波。比。布。留。保。を。和。伊。宇。延。乎。の。如。く
唱へし。こや。なれ。そハ。後。世。の。音。便。の。例。よ。て。正。し。の。ら
ぬ。こ。や。よ。こ。そ。の。後。世。の。不。正。音。を。例。と。し。その。知ハ。
て。上古の正音を論べべきことよ。何らす。その知ハ。
多藝の縮まる言よ。多藝ハ。灌ま。激る。あど云。同
言ふて。猛く烈くて。驚慄し。き意なり。古今集ふ。足引の
山下水の木隠きて。激つ心を塞そ。かねつると。何るも。

激怒る心の烈しくて、鎮免のさき意なり。波夜ハ疾ク
 強き意にて、夫流ハ其形容を云辞なり。神名ハ甕速日
 樋速日勝速日饒速日などいふ速日も、速夫利の意
 て皆同義なり。あらず速了ふ言ハ、速秋津日子、速須佐之
 男、速総別あどいひ、垂仁天皇紀ハ、當麻、邑有勇悍士、曰
 當麻、蹶速などある速ヤ同トくて、俗ハ早王男如ト云
 早王の言ハ同ト、神代紀ハ、殘賊強暴ヤ書るハ事實の
 趣ヲ想テ書るのみにて、知波夜夫流の言ハ本義ハ正
 當きる字ハはあらば、知波夜夫流ハ右ト云如ク、あ
 猛ク強ク謂テ、横悪る神を云ハさらよテ、不然神

等のうへよも、ついでくるハやなり、あはれも殘賊強暴の
 み比意トては、あはれき神ハいひのくべきよあら
 下ト千磐破人乎和為跡とあるも、皇軍ハ不奉仕マ
 猛ク烈き人ヤいふなり。上代皇化ハ服従ハざりし人
 八十建熊曾建などいひ、建ヤ同類なり。これも書
 紀ハ、梟帥ヤ書きされど、梟帥ハ、賊將トシ、多氣流ハ唯猛
 勇き意の言よテ、梟帥ハかぎりあることヤハあらざ
 れども、梟帥を多けるヤ云ハ、妨なきのこヤ。又、
 波夜ハ、疾ク知ハ風マテ、風疾夫流トイふも、あはれ
 疾ハ強クいきわひ、あはれをいふ暴風を疾風ヤいふを
 も思ふべし。即チ風ハ神の御氣マテ、もヤいふ、あはれ
 ふことヤなればなり。或人問、風を千ヤ云こと、東風疾風

萬葉古義二上

聖

ふといふ如く其知を下につけたり。其上は冠
 長戸邊命といふやい。風の意なり。さてその志は嵐
 の志は東風の知を通ひて全同言なり。これ其を
 上云ふ。○神曾著常云は神そ著といふなり。常云ハ
 了例なり。又トフと訓む。そむく。凡て右やいふ左
 手フと訓べし。もあし。のらど。そむく。凡て右やいふ左
 といふや云ことを古語ハ。右智布左智布ともいへ
 ること多し。その伊布を切め。言よ。等伊ハ智
 集中ハ五卷。丁七。布美奴伎提由久智布比等波云云。七
 卷。丁十六。云。居者雨曾零智否云云。八卷。丁三十。誰人可
 毛手爾將卷智布十八。丁十四。可豆具知布安波妣多麻
 母我など。假字書も多し。至。ま。多。是。を。等。布。とも。い。ふ。は。

知を等と轉し。あるものなり。十四。丁九。小。和。禮。爾。余。須。等
 布十五。丁十一。小。左。宿。等。布。毛。能。乎。十九。丁二十。小。伊。都。久。等
 布など。これも假字書い。ぎ。多。し。さて。今。も。猶。土。左。伊。豫
 の奥山里。よ。て。は。常。小。右。ち。ふ。左。ち。ふ。形。ど。い。へ。り。お。ま。き
 古言の遺存るなり。土左幡多。郡下山と云。何より。かく
 て。今。こ。し。の。常。云。又。七。卷。小。著。常。云。物。乎。一。卷。小。雪。者。落
 等言。雨。者。落。等。言。十六。小。吉。跡。云。物。曾。な。ど。何。る。類。の。常
 云。等。言。跡。云。を。凡。て。お。と。ご。と。よ。キ。フ。や。む。は。集。中。此
 一の書法。よ。して。爾。在。と。書。て。ナル。爾。有。卷。十一。丁。一。然。爾。是
 有。許。曾。三。卷。三十六。丁。一。而。有。や。書。て。タル。九。卷。十。丁。一。七。
 野。爾。有。な。ど。何。る。類。

卷三十散九丁二在塞敢而有鴨六卷十之在書てサ。卷
四丁小散九丁二在塞敢而有鴨六卷十之在書てサ。卷
六丁十三在者と何る類乃有書てナルハ卷二十七
之在者と何る類乃有書てナルハ卷二十七
之訓多ぐひ皆その例證なりけり。○ふべきことあり
そもくこの智布といふ詞を古今集よりに見えて奈良
布の頃までは或布と云ふことひとつも見えたるこ
朝の頃までは或布と云ふことひとつも見えたるこ
とを舊本は多くテつと訓ハ時代の詞をもちあきまへ
志らざるをこわなすよりハ多しちの詞をもちあきまへ
のみちるまへへ行はせてよりハ多しちの詞をもちあきまへ
よく更まへ近世の古學徒の文章などを見れば右の
今殊更まへ近世の古學徒の文章などを見れば右の
去り左のまへ近世の古學徒の文章などを見れば右の
いふ左のまへ近世の古學徒の文章などを見れば右の
左のまへ近世の古學徒の文章などを見れば右の
や丸て歌にハ等知布とも等布ともいふゆる多きこと
何るら約見て知布とも等布ともいふゆる多きこと

いよへの歌どもをよよく考見て知るべし。多言を
約むるのみきいよへぎまとい得るべし。多言を
あへまも言の急なるときハちふともふと云
中よも言の急なるときハちふともふと云
べきせころあれどそハなべくのことはは約め彼
れのみあらむ。從彼從此などいふべきも上の智布
用此用あれバ古やても唯言我つぐ免れみして
不同じはれバ古やても唯言我つぐ免れみして
へることハ御代御代の詔詞などをも考見よ。九て文
續紀に載る御代御代の詔詞などをも考見よ。九て文
章なごハかへる辭を謾り約免。○不成樹別爾ハ實
ていひしことははらなり。○歌意ハ實のならぬ樹はそ
不成樹毎り。○歌意ハ實のならぬ樹はそ
樹ごと。神の依て著賜ふといふ諺の何るを君ハ何
や。やらむ花能みよ。て實のなきやうよおほゆるを
も。實比那らむよ。は。の。實。あらぬ樹比如く。君よ

萬葉古義二上

三

仙覽抄
 女の男をへき
 程はなりて其
 男おくれが鬼
 魅は領せらる
 ると云事あれ
 ばそれよそ
 へて吾懸る思
 を遂させむ
 して神と領せ
 りふとよめ
 るあり

も神の著多まふことのあるむそとおどろく問は
 るべし。のく見るときは和歌小。花耳開而不成有者と
 云るまよく照應^{カナヒ}すべきこゆる形り。岡部氏^{ガノベ}の女のさる
 神の依まして遂は男を得ぬそや譬ふと云る。のな
 らぬことなりけり。但し此説ハ源氏物語總角^{ササケ}の云所
 大君の薫大将の心^{ココロ}のうつらぬを見え侍女の云所
 大の例の見奉るに。あはのぶるこゝちにてめでと
 く何はまは見えぬ。聞え多まふ御かおち有様をなとていと
 もろはなれ。見まらぬき御かおち有様をなとていと
 此いふめ。おそろしき神そつきとてまつり多らむ
 と。齒ハ打まぎて愛形なげよ。いひなれ女ありと何る
 を思よせていへるなるべし。されどこの意ハ今の歌
 の意ハ本づきてわざ。と事^{コト}を轉して云る
 の。又もとより別の
 諺の。其ハ知^チの^チ。

巨勢郎女報贈歌一首

巨勢郎女ハ元曆本官本類聚抄古寫本等ハ即近江朝

此間ハ類聚抄大納言^三字官本巨勢人卿之女也。註

せり。即安麻呂卿の妻なり。元曆本等ハ大伴宿禰田主

即佐保大納言大伴卿第二子。母曰巨勢朝臣也。と見え

て下ハ云里。巨勢人卿ハ天智天皇紀ハ十年己亥朔庚

子大錦下巨勢人臣。進於殿前。奏賀正事。癸卯巨勢人臣

為御史大夫。御史蓋今之天武天皇紀ハ元年七月庚寅

朔辛卯。巨勢臣比等率數萬衆將襲不破而軍犬上川濱

八月庚申朔甲申大納言巨勢臣

比等云云悉配流など見え多り

玉葛花耳開而不成有者誰戀

爾有目吾孤悲念乎。

玉葛タマカヅラ葛字舊本萬誤類聚抄こ此一句ハ右にかけ歌
古寫本拾穂本等從玉をうけく第三句の不成ナルの成の詞へかけていへるな
り○不成ナラザル有者ハ實の成ざるハといふなり○誰戀爾
有目はタガコヒナラモヤ訓べし目をメヤよ誰が戀

よ有むやいふなり目ハ牟やいふよ同じ○歌意ハ花
のみ開て實ならぬ樹ハは神そ著やいふとのまよへ
ども志の花のみ開て實ならぬなどいふごやき薄き
事ハ誰がうへの戀のゆだふや吾は信實マシヤカよ君をたみ
戀し〜おもふ事なる
をよと云るなるべし

明日香清御原宮御宇天皇代

此標は既く一卷よ出つ○天皇代の下舊本等よ天淳
名原瀛真人天皇淳字停と註し古寫本よは謚曰天武

天皇や云註も有り、共は後人の志

こざなること、既く云るがごとく

スツラミコトノクマヘルフチハラノキサキニオホミウタヒトツ

天皇賜藤原夫人御歌一首

藤原夫人は、八巻、藤原夫人歌を有りて、註は、明日香、清御原、宮御宇天皇之夫人也。字、曰大原、大刀自、即新田部皇子之母也。有りて、この夫人、大和國大原村に住はせし故、大原、大刀自、呼なせるなり。此ハ鎌足大臣の女にて、五百重娘なり。天武天皇紀は、次夫人氷上娘、弟五百重娘、生新田部皇子、と見ゆ。又廿卷、五十藤原

後考
夫人をキサキ
と訓るハ、
ハ上加ナ
委辨を

夫人、歌を有りて、註は、清御原、宮御宇天皇之夫人也。字、曰氷上、大刀自、見え多るハ、此、夫人の姉なり。夫人ハキサキ、と訓べし。古ハ天皇の大御妻等を后と申て、其中の最上なる一柱を、殊に尊みて、大后と申し、其餘後小妃夫人などし、申を班までを、幾柱よても、后と申せる。天皇、反正天皇、紀ハ、皇夫人、ま多夫人、敏達天皇、紀ハ、夫人、こきら、をキサキ、と訓るは、古ハ、所へる訓なり。字鏡ハ、も、妃也。支佐支、有りて、古事記傳ハ、見えて、猶委く論へる。岡部氏考、別記ハ、論へる説どもハ、みな中々のひが、こきら、も、あり

ワガ サト ニ オホ ユキ フレリ オホハラ ノ フリニ
吾里爾。大雪落有。大原乃。古爾

シ サト ニ フラマク ハ ノチ
之郷爾落卷者後。

大雪は、まむハ非^レ。オホユキを訓了宜し。此、下高市皇子尊殯宮時歌よ。大雪乃亂^レ而来禮十九家持卿歌よ。大宮能内爾毛外爾母米都良之久布禮留大雪莫踏禰乎之などあり。○大原は續紀ふ。天平神護元年十月己未朔辛未。行幸紀伊國云云。是日到大和國高市小治田宮。壬申車駕巡歷大原長谷。臨明日香川而還。見えて今

も飛鳥の西北に方ふ大原村といふありて。即藤原宅もいふやなり。皇居の藤原ハ異地なり。前よ云る如し。あるハ多武峯記よ。藤原宮ハ大原也とあることなり。鎌足大臣の本居よて。夫人の生給ひ一處なれば。このややこよ。夫人の下里居賜ひ一むるべし。○古爾之郷也ハ。天皇龍潛しむる。此大原夫人の許へかよひ賜ひ一ゆゑよ。能多まふふるべし。九てむる一通ひ一女子家を古郷也云こと多し。これハ女の家よもかぎらむ。九てむる一のよひ一處をば然云こやにて。貫之の人はいざ心も知む故郷ハやよ免るは。昔時々やど里一家をいふなり。されふて意得べし。

空あり。神名帳小。諸國よ意加美神社あり。豊後風土記
小。球覃郷。此村有泉。昔景行天皇行幸之時。奉膳之人擬
於御飯。令汲泉水。即有蛇竈。謂於於是天皇勅云。必將有
鳧。莫令汲用。因斯名曰鳧水。因為名。今謂球覃郷者訛也。
とあり。たもそも於可美神云は。雨雪を掌きる神な
るが故よ。かく祈申せるなり。乞字。舊本言とあるハ。寫
誤なるこやうつぬけきハ。今改めつ。乞字。草書いとよ
く似て混や。江一コヒテとよひづ。十三十九に天地
之神乎曾吾乞十五ニ丁よ。安米都知能可未乎許比都
都安禮麻多武などあり。は。その證と云べし。なほ集中

よ。神小乞祈云云。こやいと多の里。言而とありてハ。通えぬことなる
をいふ。か。今まで註者。○令落は。フ。ラ。シ。メ。シ。とよ
等。此。心。は。つ。ら。ぎ。里。け。む。○令落は。フ。ラ。シ。メ。シ。とよ
むべし。岡部氏ガ。フ。ラ。セ。タル。とよ○推之の之は。その
一。江。ぢ。き。と。り。い。で。ハ。つ。よ。く。い。ふ。助。辞。なり。岡部氏ガ。之ハ。之。毛。
の畧言といへ。○彼所爾塵家武は。其所よ散けむなり。
即塵と云も。散意の名なり。○歌意は。そのこの御里よ。大
雪降里と詔ふが。其大雪と見給ふハ。こがにむ里の岡
の。竈。神。よ。乞。祈。す。吾。里。小。降。一。免。し。その大雪の摧けし
片端が。い。れ。う。そ。こ。よ。散。多。る。よ。こ。そ。何。ら。免。と。御。戲
言。以。應。て。ま。ま。よ。は。き。和。奉。き。る。ち。り。そ。此。詞。の。を。あ。り

くもぐれて、奇々妙々なるハ、この

夫人ならでハ、誰うよくいはむ

フザハラノミヤニアツシタシロシシ、スメラミコトノミヨ

藤原宮御宇天皇代

此標も既く一巻よ出つ。持統天皇文武天皇、兩朝の宮
號なり。○天皇代の下。元曆本よ高天原廣野姫天皇と
註せり。此字舊本よハ死マ。天皇謚曰持統天皇と註里。
又古寫本よハ、持統天皇の註よ引續きて、元年丁亥十
一年、讓位輕太子尊號曰太上天皇也と有り。共よ後人
の志どざなり。既く云る如く、此ハ持統天皇文武天皇

兩朝の標なるを、一御代のみの

標と意得よるひびごとなり

オホツノミコノシヌヒクダリテ

イセノカミノミヤニ

大津皇子。竊下於伊勢神宮

ノボリマス トキニオホクノヒノミコノヨミマセルミウタフタ

上来時。大伯皇女御作歌二

首

大津皇子ハ、書紀天武天皇卷八、先納皇后姊、大田皇女、
為妃。生大来皇女。與大津皇子。同十二年二月己未朔、大

古今真名序
 自大津皇子之
 初作詩賦詞人
 才子慕風繼塵
 移彼漢家之字
 化我日域之俗
 民業一改和歌
 漸衰

津皇子始聽朝政十四年正月丁未朔丁卯授淨大貳位
 持統天皇卷ふ朱鳥元年十月皇子大津謀反發覺逮捕
 皇子庚午賜死皇子大津於譯語田舍時年二十四妃皇
 女山邊ヤマノヘ天智テンチ被髮徒跣奔赴殉焉見者皆戲歎ナゲキス大津天渟
 中原瀛真人天皇第三子也為天命開別天皇所愛及長
 辨有才學カド尤愛文筆詩賦之興自大津始也懷風藻よ幼
 年好學博覽而能屬文及壯愛武多力而能擊劔云云時
 有新羅僧行心解天文卜筮語皇子曰太子骨法不是人
 臣之相以此久在下位恐不全身因進逆謀と見えて大
 伯皇女は御同母兄弟歿れバことよむつま〜くお

は〜ませり○竊下云云天武天皇ハ十五年九月九日
 崩御せるを其十月二日大津皇子御謀叛のこと覺
 はれく同三日賜死ウシタレま〜くき天武天皇大御病おは
 しまはるとよりはやく御大事おほ〜立て其七八
 月の間ふ彼大事の御祈且ハ大伯皇女亦も相語賜は
 むやて伊勢へは竊下里給ひつらむゆらバ清御原宮
 の標内よ載べきよ彼天皇崩ま〜るよ後のおとは
 本よりふて崩賜はぬ暫前のことも崩後よあらはれ
 し故ふこの御代よ入〜ゆらむこのことはちやく岡部氏考別記よもいへ
 り○大伯皇女ハ書紀齊明天皇卷よ七年正月壬寅御

船西征甲辰到于大伯海時大田姬皇女產女焉仍名是
オホクノ 女曰大伯皇女和名抄曰備前國邑久郡於保久 天武天
 皇卷二二年夏四月丙辰朔己巳欲遣侍大來皇女于天
 照大神宮而令居泊瀨齋宮是先潔身稍近神之所也三
 年冬十月丁丑朔乙酉大來皇女自泊瀨齋宮向伊勢神
 宮十四歲 持統天皇卷二朱鳥元年十一月丁酉朔壬子奉
 伊勢神祠皇女大來還至京師續紀大寶元年十二月大
 伯内親王薨天武天皇之皇女也なぞ見え多り十四歳
 よて齋宮よ立こまひ十四年よ當て京師よ還賜へる
 なり○二首二字舊本よ無ハ脱多るなり古寫本拾穂

本等よ

従つ

ワガセ 吾勢枯乎。倭邊遣登。佐夜深而。
アカトキ 雞鳴露爾。吾立所霑之。

吾勢枯乎。枯字古寫本拾穂水 勢枯ハ兄子の假書な里。
 大津皇子ハ御弟なれども女よ至は兄といふ例よて。

仁賢天皇紀よ古昔不言兄弟長幼女以男稱兄男以女
 称妹とあるがごとし。ふ不岡部氏考別記よも論へり。
 但し彼説の中よ夫を勢妻を伊

毛^モ云^クハ、伊^イ那^ナ那^ナ岐^キ伊^イ那^ナ美^ミ命^ノ此^ニ御^ミ妹^{イモ}兄^{ケイ}夫^フ妻^{ツメ}と成^{ナリ}賜^{タマフ}
 ひ^ヒし^シよ^ヨ里^リ始^{ハジ}里^リて、後^{ノチ}よ^ヨ他^タ人^ニど^ノち^ノの^ノ夫^{ツメ}婦^メと^{ナリ}成^{ナリ}賜^{タマフ}
 志^シあ^アい^イひ^ヒな^ナら^ラへ^エる^ル由^ユ縁^ヰハ^ハさ^サら^ラよ^ヨな^ナし^シ ○[○]倭^{ヤマト}邊^ヘ遣^{ツク}登^トハ^ハ
 大^{オホ}和^ワ國^{クニ}へ^ニ遣^{ツク}と^トの^ノ意^イなり^ニ、邊^ヘハ^ハ物^{モノ}へ^ニ行^クの^ノへ^ニなり^ニ、登^トハ^ハ
 と^トの^ノ登^トなり^ニ ○[○]雞^ニ鳴^{ケル}露^{ツキ}爾^ニハ^ハ、ア^アカ^カト^トキ^キツ^ツユ^ユニ^ニと^ト訓^ルべ^シ
 し、雞^ニ鳴^{ケル}の^ノ字^ジハ^ハ、推^ス古^コ天^{テン}皇^{スミ}紀^キ、阿^ア可^カ等^ト伎^キハ^ハ、明^{メイ}時^{トキ}の^ノ義^イなり^ニ、
 集^{シツ}中^{チュウ}假^カ字^ジ書^シよ^ヨハ^ハ、み^ミな^ナ安^ア可^カ等^ト吉^キと^ト何^{ナニ}里^リ、阿^ア可^カ都^ツ伎^キと^トい^ハ
 於^オ保^ホ安^ア加^カ止^ト支^キ也^ヤ、阿^ア加^カ止^ト支^キと^トよ^ヨめ^メ里^リ、又^{マタ}所^{トコロ}晨^{アサ}也^ヤ、
 上^ウま^マり^リ、そ^ノの^ノ別^{ワケ}死^シか^カる^ル一^{ヒト}さ^サよ^ヨ、見^ミお^オく^ク里^リま^マる^ルら^ラひ^ヒる^ルと^ト
 て^ト、も^モは^ハや^ヤ夜^ヨも^モ更^シ行^ク多^クる^ルよ^ヨ、曉^{アカツキ}お^オき^キの^ノ露^{ツキ}ふ^フ立^タぬ^ヌき^キし^シ、其^{ソノ}

艱難ハいふばあ

りあしとねり

フ
 タリ ヌケド ヌキ スギガタ キ アキ ヤマ ラ イカ
 二人行^{フタリノウチ}杼^ハ去^ク過^ス難^{ガタキ}寸^{サツ}。秋^{アキ}山^{ヤマ}乎^{ナラ}。如^{イカ}

デカキミガヒトリユエナム
 何^{ナニ}君^{キミ}之^ノ獨^{ヒト}越^コ武^{タケ}。

御歌意ハ、二人手携は至て行ども、鹿の音木葉散み
 だれなどして、甚物内びあきて、行過がとき秋山なる
 を、いかよしそ、只獨君が越賜ひなむとな里、むつま
 しき御はらからの、えづらしき御對面よて、ほともな

く帰らせ給ふ御別よは、かくもよませまふべき事
なごら身よむやうよたこゆるは、謀反のことをた
こしめして、事のなるまならずもおほつゝあけきバ、又
の御對面もいゝならむとおわしける御むねより出
ればなるべしと契沖の

云る、信よ然るまや取置

オホツノミ コノオホクニイシ カハノ イラツニ ミ ウタ

大津皇子贈石川郎女御歌

ヒトツ

一首

石川郎女ハ傳詳あらば此下よ字曰大名兒とあるハ
同氏別人あるべしこゝあるハかの山田郎女あるべ

足日木乃山之四付ニ妹待跡。

吾立所沾山之四附ニ。

足日木乃ハ字仙覺註本は山の枕辞なり。日の言清て
清濁考。さてこの詞の意昔来くは説あれが皆阿

多らむ。それハ足引ガ中よ。近頃本居氏古事記傳よ。阿志比紀
云。城ハ九て一。構なる地を云て。此ハ即山の平なる
處を云。其ハ周よ限。何りて。自下。あまへなれ。バるり。さ
れ。ば。足。を。引。さ。る。城。の。山。と。い。ふ。つ。い。け。な。り。と。云。る。ハ。
舊。説。ど。も。よ。見。る。城。の。山。と。い。ふ。つ。い。け。な。り。と。云。る。ハ。
る。ふ。似。さ。れ。れ。ど。も。な。わ。よ。く。思。ふ。よ。山。の。周。よ。限。何。り。と。
て。一。の。ま。へ。の。千。重。百。疊。奥。域。も。知。ぬ。大。山。を。バ。い。の。で。あ。
こ。そ。何。ら。也。千。重。百。疊。奥。域。も。知。ぬ。大。山。を。バ。い。の。で。あ。
一。か。ま。へ。の。も。の。と。は。見。ず。ハ。廣。大。無。偏。な。る。古。人。の。心。詞。
量。を。え。取。き。て。考。へ。見。ず。ハ。廣。大。無。偏。な。る。古。人。の。心。詞。
よ。ハ。協。ふ。べ。き。こ。と。よ。何。り。に。な。む。か。く。今。ま。で。の。説。と。
も。の。信。ぶ。さ。た。よ。り。て。余。年。月。の。よ。く。お。も。ま。づ。
ひ。え。ぐ。ら。一。て。今。や。う。り。て。余。年。月。の。よ。く。お。も。ま。づ。
阿。志。は。伊。加。志。ふ。て。伊。加。の。茂。檜。木。之。と。云。な。る。べ。し。茂。
ぞ。は。茂。穂。茂。弥。木。生。ま。と。重。日。嚴。矛。伊。加。志。御。代。な。ど。の
茂。ふ。て。此。ハ。檜。の。木。孔。茂。と。榮。元。多。る。を。稱。美。て。茂。檜。木。

とハ云るならむ。地。名。城。華。城。華。穂。山。などいふも。も。や。
然。る。意。な。ら。バ。伊。加。志。を。切。て。か。く。て。檜。を。バ。今。世。よ。ハ。
阿。志。と。云。る。例。と。も。な。る。べ。し。か。く。て。檜。を。バ。今。世。よ。ハ。
檜。之。木。之。の。み。呼。ぶ。古。ハ。比。伎。と。そ。い。ひ。け。む。都。婆。伎。と
い。ふ。も。ま。を。ハ。都。婆。と。云。け。む。を。都。婆。市。を。海。石。榴。市。と
其。を。都。婆。乃。木。之。云。む。一。て。都。婆。伎。と。云。る。例。を。も。合。思。
べ。し。さ。る。は。集。中。よ。こ。の。枕。詞。を。足。檜。木。と。も。多。く。書。る
を。七。卷。一。丁。ま。じ。十。一。よ。三。處。丁。三。十。三。丁。三。十。九。十二。よ。二
處。三。十。八。丁。ま。で。よ。足。檜。と。も。書。多。る。を。合。思。べ。し。と。呼。
し。な。ら。バ。檜。の。一。字。を。か。く。あ。ま。か。く。て。山。よ。属。く。ハ。
茂。檜。木。の。生。樹。る。山。と。云。意。よ。い。ひ。の。け。多。る。もの。なり。

萬葉古義二上

禿

さて志あらば、生ナマとる樹ツクとらういふ言コトなくて足タラシハぬ
 ごとと思ふ足タラシきど其シハ白浪シラナミ之濱ノハマ白管シラスゲ之真野マノマ炎カサヒ之春ノハルき
ら白浪シラナミのよほる濱ハマ白管シラスゲ生ナマなどやうよ云イハること。枕マクラ
る真野マノマ炎カサヒの燎ホる春ハルの意イなり。なほ云イハること。枕マクラ
 詞コトよハ何ナニまよ見ミえ多オホれバ妨サマシなし。かくて山ヤマ小コハ數種スベテ
 の木キあまきバ、檜ヒノキをのみ云イハむハ、いとわしくなナしとおも
 ふ人も何ナニるべけれど、志ココロあらむ、さるは檜ヒノキハ、諸木モトモトの長ツカサ
 上ウヘよヘこ。此コノを真木マキとも稱ナヅケ云イハて、その長ツカサ上ウヘなる檜ヒノキを云イハ
 ハ、其餘ノホカの諸木モトモトハ、皆みな自ミ其中ノナカよこもきることなれハ、な
り。集中シウチュウよ、真木マキ之ノ立タテ荒アラ山ヤマとも、真木マキ○山ヤマ之ノ四シ付ツ二ニ之ノ宇ウ、
と本ホン作りツクリハ、乃ナラハ、山ヤマの草木ソウボクより志ココロ多オホだる滴シヅメよなり。金葉集キンエツシュ

さを妹イモあマツるらめや旅宿リョシュクして十九ジウジュウ一イチ丁テイよ、足アシ日ヒ木キ之ノ山ヤマ
山のノ一イチづツくクよ袖スエぬらラれとハ、十九ジウジュウ一イチ丁テイよ、足アシ日ヒ木キ之ノ山ヤマ
黄葉ワカ爾ニ四シ頭ダウ久ク相アヒ而シテ將マカ落ラク山ヤマ道ミチ乎カ公キミ之ノ越コエ麻マ久クと何ナニり○
妹待マツ跡アトハ、妹イモを待マツとての意イなり。跡アトハ、マての跡アトりり○
沾字シヅメ仙覺センケツ註シュ本ホンよ洽シヅと作サシ呈テイ○山ヤマ之ノ四シ附ツ二ニ上ウヘよのノま
へる詞コトをふフと多オホび反ウチカヘ覆フてのノまへるハ、その深フカ切キ意イ
を何ナニらはし給タマフへるなり○御歌ミウタ意イハ、郎女ヲウメを立タテ待マツとて、
山の草木ソウボクより志ココロ多オホる滴シヅメよ沾シヅて、吾オレ待マツ居イそノ久ク一
き間マの艱難ケンナンをバ、いハるハありとク思オモふそやとれ多オホま
へるなり、妹待イモマツと山ヤマのノ一イチづツくクよ吾オレ
立沾シヅぬと句クマを打ウつへテ聞キべし

石川郎女奉和歌一首

吾乎待跡。君之沾計武。足日本

能山之四附二成益物乎。

吾乎待跡ハ吾を待との意なり跡ハとの跡なり
○歌意ハ吾を待賜ふとして君が沾賜ひけむその草木
此滴よだふもあまて何らましをのむさらば疾君よ
配居くやよのく障を多くてまよやあよ出合まわら

はることもえせびて心の内よのみくさ

みをりしそのかなーみはせどをとり

大津皇子竊婚石川女郎時

津守連通占露其事皇子御

作歌一首

女郎拾穂本よハ郎女と作里○津守連通ハ續紀よ和
銅七年正月甲子正七位上津守連通授従五位下十月

丁卯為美作守。養老五年正月甲戌。詔曰。宜優遊學業。地
為師範者。特加賞賜。勸勵後生。因賜陰陽從五位下津守
連通。絁十疋。絲十約。布二十端。歛二十口。同七年正月丙
子。從五位上。など見ゆ。ト道よ勝多里一人を見えり。
○其事の下。拾穗木よ時。字何れや。上ふ

時と阿きハ。わづらはしくつとねし

大船之津守之占爾將告登波

益為爾知而我二人宿之

大船之は。十五九丁十二丁。於保夫祿と津やいはむ

ての枕詞なり。大船此泊る津のよしなり。百船の泊

る津島形ともいへる。同ト○將告登波ハ。十一丁十三

事靈八十衢。夕占問占正謂妹相依。玉梓路往占占相

妹逢我謂。又三丁。夕ト爾毛占爾毛告有今夜谷十三

六丁。夕ト之吾爾告良久など見ゆ。トふあらはるるを

告やいへ里。又出るとも云り。十四丁。武藏野爾宇良

敵可多也。伎麻尤氏爾毛乃良奴伎美我名宇良爾低爾

家里。又丁。於布之毛等許乃母登夜麻乃麻之波爾毛

能良奴伊毛我名可多爾伊氏年可母。などり。○益

為爾知而ハ、益為爾の三字ハ、必^キ誤字ナリ。岡部氏ハ、
 正^シし^ハなりといへどい^ハ、ウラハ直^ニ益^ニ為^ル久^クと
 こ^ノい^ハは^ハ西行^ノ立^テ春^ノ歌^ノま^ニさ^ニ見^ユて^ハか^キ
 ふ^レ初^メ夢^トし^テよ^クめ^ルハ、今^ノ御^ノ歌^ノ誤^リ字^トよ^リて^ハめ^ル
 ぢ^レバ^ハ證^トと^モる^ハ、今^ノ御^ノ歌^ノ又^ハ畧^ノ解^ト本^ノ居^ノ氏^ノの^ノ説^トと^モ
 為^ハは^ハ氏^ノの^ノ誤^リな^ラむ^ト云^フて^ハ十^ニ四^ノ卷^ノ武^ノ藏^ノ野^ノの^ノう^ラ
 へ^ハ加^ヘ多^クや^キ麻^ノ左^ノ氏^ノも^トあ^ルを^ハ據^トと^モセ^レれ^ドあ^ル十^ニ
 四^ノ卷^ノ麻^ノ左^ノ氏^ノ同^ノ卷^ノ二^ノ十^ニ四^ノ丁^ノに^ハ可^ク良^ク須^ク等^ノ布^ノ於^テ保^テ乎^ト
 曾^ハ杼^ノ里^ノ能^ク麻^ノ左^ノ氏^ノ低^ク爾^ノ毛^ノ伎^ノ麻^ノ左^ノ氏^ノ奴^ノ伎^ノ美^ノ乎^ト許^ク呂^ノ久^ク等^ノ曾^ハ奈^ク
 久^ク正^シ定^ム何^レり^テ麻^ノ左^ノ氏^ノハ^ハ真^ニ實^ノの^ノ意^トなり^シ畧^ノ解^トよ^ク告^スハ^ハ俗^ト
 ハ^ハ正^シ定^ムの^ノ意^トなり^シと^モ云^フる^ハあ^ルに^ハ麻^ノ左^ノ氏^ノの^ノ告^スハ^ハ俗^ト
 小^ノあ^ルに^ハ有^ク躰^トよ^ク告^スとい^フふ^ハこ^トよ^ク麻^ノ左^ノ氏^ノの^ノ告^スハ^ハ俗^ト
 り^ハされ^バ占^ムよ^ク真^ニ實^ノ尔^ノ告^ス多^クこ^トよ^ク麻^ノ左^ノ氏^ノの^ノ告^スハ^ハ俗^ト
 ハ^ハそ^レと^ハ意^トなり^シと^モ云^フる^ハあ^ルに^ハ麻^ノ左^ノ氏^ノの^ノ告^スハ^ハ俗^ト
 試^シま^シい^ハ益^ハ兼^テの^ノ誤^リ益^ニ草^ノ書^ノ似^テ多^ク為^ハハ^ハ而^テの^ノ誤^リる^ハ
 草^ノ書^ノ似^テ多^ク爾^ハ乎^ハ誤^リ尔^ハ字^ノの^ノ草^ノ書^ノよ^ク作^ル時^ハは^ハ字^ト

よ混ひ易し、ゆらば兼而乎知而なり乎ハことをわも
 く思をける助辞なり○我二人宿之古事記中卷神武
 天皇大御歌よ、阿斯波良能志邪去岐表夜爾須賀多多
 美伊夜佐夜斯岐氏和賀布多理泥斯○御歌意ハ、津守
 連がト筮ふかくうらなひ露頭されむとハ、兼て心よ
 は知多きども、堪忍ふことを得為びて、吾二人相宿
 してし

空那里
 ヒ ナミノ ミ コノ ミトノ オクリタマル イシ カハノ イラ ツメニ
 日並皇子尊贈賜石川女郎

御歌一首

女。郎。字。曰。大名兒。

日並皇子尊は天武天皇の皇子草壁皇子尊の更名ナリナリ也。御母ハ鷓野讚良皇女也。持統天皇紀云。天命開別天皇元年。生草壁皇子尊於大津宮。天武天皇紀云。十年春二月庚子朔甲子云云。是日立草壁皇子尊為皇太子。因以令攝萬機。十四年春正月丁未朔丁卯。授淨廣壹位。持統天皇紀云。三年夏四月癸未朔乙未。皇太子草壁皇子尊薨。續紀云。天平寶字二年八月。勅日並知皇子命。天下未稱天皇。追崇尊号古今恒典。自今以後。宜奉稱岡宮。

御宇天皇と有り。同紀云。神護景雲四年夏四月庚辰。以日並知皇子命薨。且始入國忌などあり。さて日並知は。ヒナニシラス空訓べし。そハ日並所知とも書あるふて知べし。ヒナメシと訓むハいとるりし。さ續紀四巻詔ふ。日並知皇子之嫡子也。ある處一本ハ日並所知と書。又本朝月令五月五日節會事條。右官史記を引て云。太上天皇日並所知皇元年四月。勅云云。如ど有り。かく思ひ定めて後栗原寺の塔に露盤の記文に寫しを見る。此栗原寺者。仲臣朝臣大島惶惶誓願奉為大倭國淨美原宮。治天下天皇時。日並御宇東宮。敬造伽藍。

萬葉古義二上

卷

云云と何りあれ日並御宇をヒナミシラスと訓じ
 て何とウ申さむ已が考多あハざりけ里さて歌よは
 少彦名神を省て少彦とも少御神スチミカミも申せ—ごとく
 日並所知ヒナミシラスを省て日並と作又常語よも志の申せ—か
 ら集中よハ日並空のみ書るなり一巻よも日雙斯皇
 子命乃コノミコトの誤なりや見え此下ふも日並と書き且目錄
 よも日並空のみ書多ればもとより知字を脱せるふ
 ハ何らざることをはとるべ—○贈賜贈字目錄よは
 なし賜字類聚抄よはな—○石川女郎ハ傳詳からば
 ○字曰大名兒大名兒の三字舊本ハ脱セリ目字ハ阿
録又類聚抄古馬本等ハ従フ

邪那ヤナと訓里名義ハ未詳ならむ谷川士清阿倭訓栞よ
 り人よ交るよ里呼る名なればなりと云里人よ交る
 より呼とは人と我と互よ名をバ諱里て字を呼交は
 こやなり名ハ常よ云實名名衆のことなりかきま
 此説はいはきし如おもなるきどなる古言の趣よ
 もときり其由ハ字の自ら交ハる義ならバさも何る
 べきを人の呼交はるやがて直よ交名といはむごと
 きは古意ならむ又一説ハ阿陀志名といへるも意
 得を異名の意ならバ直よ阿陀志名とこそいふべけ
 きはてもならむさハいふべきもく—上古ふは氏姓名
 きよあらば猶よく考べし
 の三ありて其餘字號などいふものはさらよ取あり
 しなり氏姓のハとははてその名と云ものはもと其
 人の容貌功勞其外なよくま此由縁ありて其を贊美
 て負せ多るとのなりはまきバ名を呼は其人を尊むか

多那里古天皇皇后皇子などよは御名代と云こと此
あましよても後よ名を稱を不敬と云とは表裏の
多かひよてその尊稱多里しを志るべし。清寧天皇ハ
ら御髪白おはしましける故御諱を白髪大皇と申し
き此天皇御子おはしまさるにけり故よ御名の後
世までのこのるべきことをおもひて白髪部を
おのせとまへる類なり。こま忌避るとは反對ならぬ
やさてあるらば其名は自ら稱ましきこととそし思ふ
ハ漢意なり其人の負持多らむうへハ自他の差別は
いのでかゝるを漢國よは姓氏名字號此五ありて
自稱よは多那らむ名をいひ人より呼よハ必字を稱
ま多其名字との間よ人より權カリふ呼ぶ稱を號と云
里さて人の名を呼自字を稱をばい多く不敬とせ里

あましよよりて世の漢學者は御國よもとより字號の
なを里しことを缺典如思ふめり又その字號はな
きをあるぬことやよおもひて自私よ字號をまうけ
つくは近き世に儒者ども常の風よめづら
あらぬことなり。古今貫通こと多れは漢國の風
姓名だよ何まバ古今貫通こと多れは漢國の風
をや抑萬の事こまふありは正しくたはやかなる
俗ふしよまづり何ありは正しくたはやかなる
か如く多きども九何事も主とよりあるこまふ
はるハよあらぬことよて多だ萬づみとぞなるよ大
らなるこそ世中の真なり。天下もおまひよ
治まるものよはありけり。さるを此漢國などハ
と人此心悪くはがなくてやいも此まバ事の乱のい
多ありしより其を救む人の世ハことだよ足バあ
よ定免つるものなれ。人あちあちよ足バあ
うぬおとはなきを強てあまのふあちあちよ足バあ
免ことせむはあへりて混雜の基とハなるべきもの
そ近く多とへバ人の身此病よ罹里多らむべきよこ
そ藥を嘗てそを治むる方おそ何ま多らむべきよこ
實ならむふ藥を服むハ無益ならむやそハ多だよ無

益のみよも何らむ。あへては其身を傷ふこと。も
あるものをや。世中の萬此事みなあるのごと。さ
てや。此方よても諸の事。皆漢國風をうつ志學ぶ世
とまりてよ。里名を呼を不敬とほる。あとははなき里
しことよ。あで多く控むる。一き古風を失へる。大志き
時世の變なり。多里。故天皇をバ。某官御宇天皇と記
よ。明。日。香。能。清。御。原。乃。官。爾。天。下。所。知。食。之。八。隅。知。之。
或ハ鎌足公を内大臣藤原卿。諸兄公を左大臣攝卿な
ど。題詞よも記し。たり。あまきども。そハかの漢國風を
うつし。とらき。以降の事よて。其風の行ハきざりし。上代
の人名をバ。漢國風のうつまる。後の人死いふよも。忌
避る事なくして。あやひやむことなきかぎりなりし。
を。上。代。の。ま。い。ふ。申。せ。し。こ。と。あ。り。し。や。見。え。し。り。尊
るども。奈良人のよみとることありし。や見えし。り。尊

てついでよ。いはむ。かやうな名を避ること。の。嚴。く
なれたる世の風をなりても。名を皇太子皇子諸王の御
名をバ。いさし。かつ。ま。げ。ふ。く。題詞よ高市皇子尊
或ハ合人皇子。或ハ軍王などやうな多くある。ま
て歌詞よさへ。日並乃皇子命。或ハ麻績王三野王など
よみて。あべて忌避る事なきハ。天皇御諱よも。又臣下
の名よも。各別なる。理なる。あ。と。あ。て。志。り。名。を。呼。を。不
つ。卷。中。百。十。九。丁。な。委。辨。あ。り。あ。て。志。り。名。を。呼。を。不
敬とほるより。其此名をバ。避る。官位姓氏職業などを
よび。或ハ字アテをも負せ。呼し。こ。や。見。え。し。り。此。集。な
どの頃ハ。ちらよも。いはむ。その以降人の名を呼し。例
あつてな。古今集よ。藤原公利よ。みて。贈。き。る。ハ。その名を
朝なけよ。見べき君と。し。や。よ。み。て。贈。き。る。ハ。その名を
さし。何。て。い。ふ。こ。と。を。憚。り。て。さ。ざ。と。あ。く。し。て。よ。み
入。る。を。思。ふ。し。又。後。撰。集。よ。在。原。利。春。が。身。ま。り。け
る時よ。伊勢が。来む。や。春の花を見。ど。ハ。と。よ。え。る。
此ハその人を。外よ。さ。い。ふ。さ。へ。は。い。り。て。其。名。を。あ
くし。り。古今集。壬。生。忠。岑。が。長。歌。よ。何。は。き。昔。邊。在。き

てふ人麻呂こそはうきしけれと何るハもとより賤
官の人名を避しこと何りしけらねぞそきも其人は
さし對などしてハさいふべうらむ遠昔の人なれば
なまふことなし枕冊子よ義懐中納言の名をさるし
形より上達部の御名書べきよ何らねど御何りさま
常人よまさりておははれる故よ他人よまがハドろと
免よごご名を何らはせるよかごごことごり
多り又同冊子よ殿上人宰相などの名をついさましげ
ふらびいふハいとあとなるることなりといとくそ
しきりあろからぬ人をバ其人のなき所よて常のこ
と思ふひよいふさへその名をいふをバ不敬とせさこ
とと思ふべしこれ集よ高位高官の人字を避て書さ
ざると同理なり大鏡三よ太政大臣小野官實頼公の
御雅名を牛飼と申しきちまそ御族ハ牛飼をバ
牛つきのあまひなりと見えたり是類多し吾妻
鏡よ平時子が頼家を諫勉多る語よ源氏等者幕下之
一族北條者我親戚也仍先人頻被施芳情常令招座右
給而今於彼輩等無優賞刺皆令喚實名給之間各以貽
恨之由有耳聞と何るを見せバ彼頃もさし對てそ
人名を呼をバこよなく不敬とせよことよて對てそ

り下ごまの輩をもあやしくハ呼ざりしこと知れど
りさハいへど名を避ることハ漢風みさありよ
てよ至このあとの事よこそあれ上よ辨へる如く
その根源ハ其人を賛美ま頁せある名なきバいクぞ
名を呼を無禮とやハせむやて千有數百年來の風よ
もとりて今世よ物せむこやはありよも何るまどき
まごたれど其本義ハかやうよてありしや云ことを
辨知ざるやきは時世の變革を考べらばと知べし
さるかききバ今世よつけるハ天皇大臣の御名ハさらな
り身の初とくよつける君父等此名をバかりよも
いふおどき事なるよ近世よハ吾主君の實名をさし
ていゆさあつましげなく其公某君など常よ口ふ
もいひ物よも記しなごを足るハ其本義を辨あふ
もあらむ世風を考するよも非ど多し何心なく暗愚
なるよりの事なりいふこと今よりして思へバ自の主君
此名をさしといふこと今よりして思へバ自の主君
とらよはらいとあそそは何時よ至志あるそや云よ
きことならぬやあそそは何時よ至志あるそや云よ
其は詳よは知あし孝徳天皇の御代はありやかつ

がつちるこやよは那まりけむ。かの御代よ其御名を
畏しとて御名代を置く、ことをやえられ又字を
云ことの見え始るもかの御時なり。元て萬漢風を
學びせられあるも其されど人の名をば諱^{ヒカ}呈て勿^ナ呼^ヒ
時よりなればなま。そ又入毎ふ字つけよや云うるはしき御制ハ。後まで
もあきこやなれば。唯自然よ漢風ようつれるものな
らむ。但し人の名をば避て勿呼そといふ御制のあり
史籍よもを多ることも何らむ。光仁天皇の御名を
白壁王申し桓武天皇の御名を山部王と申しける
が故よ。白髮部の姓を真髮部よ改色山部の姓を山
為よと續紀延暦四年五月詔よ見えその後淳和天皇
の御名を大伴と申しける故大伴の姓を伴や呼後嵯
峨天皇御名を國人や申しける故國人や何るをばか
ニ。タ。と唱へ後宇多天皇の御名を世仁や申しける
故よ。世人や何るをば人や呼み呼せらむ。又平城

天皇大同四年九月乙巳改伊豫國神野郡為新居郡。以
觸上韓也。後紀よ見え仁明天皇長十年天下諸國
人民姓名及郡郷山川等號有觸諱者皆令改易。と
聚國史よ見え多り。光仁天皇の御名を避しより以^ナ往^ル
諱を避し制見えざれば其世よりのみやのまよ
べけきどもそきより先よ何りしことのみまよ
史籍よ傳はらぬことも何るべし。さて是ハ皆天皇の
御諱の御うへの事よこそあきなべく人の名を呼
むば不敬とせよとの制は見えざれども前よもいへ
る如く此集前後よりおのあきまべて人名を憚里
旨なればさる詔の何りしがさましく傳はらぬこや
も有べし。といふなり。はば世人毎ふ字つけよとい
ふ御制ハ。まことよ後までもありしこや。思はねば
ことさらよ字つくるハ。自^ガ私^ナのこざなりや知べし。
かしきバ。此方よて阿邪名と云しは。唯よ名のは至
ふ人より呼料ふ。漢人の字とは異きども亦其様大
あさは似るものなるゆゑよ。字とハ書るなり。漢國

は男子は二十歳となりて冠一宇つけし。そを表徳
号やも云。女子は十五歳ふなりて嫁を許し。并し字
つくと云。定れる禮式なり。此方より字や云は。制禮
の外なれば。やよりけり。ことはさらになし。されど
人より呼稱なるゆゑ。ま。號は又ふとみ無用のもの
なれば。古くは聞も及ハ。多ま。史籍やものの中ふ。
某號曰某と云。こや。はあれやも。そは多だいやありそ
免よ呼なせるものゆゑ。こやさらふ號と云。名目の定
至多るものふは。何ら。あてて字やいふもの。古く
ものふ見え。るを考ふるふ。まづ書紀仁賢天皇。卷ふ。億
計。天皇。諱。大脚。字。島郎。云云。細書云。更名。大為。自餘諸天
皇。不言諱字。而至此天皇。獨自書者。據舊本耳。
こハ頭宗
天皇。卷細

書ふ。譜第曰。市邊。押磐。皇子。娶。蟻。臣。女。美。媛。遂。生。三。男。二。
女。云云。其二曰。億計。王。更名。嶋。稚。子。更名。大。石。尊。云々。
何るより。島郎ハ。シ。ノ。ワ。ク。ゴ。と。訓。べ。く。諱。字。云。
字と云。は。漢。文。風。よ。書。き。多。る。此。み。の。事。よ。て。實。ハ。大。
脚。も。島。郎。も。多。だ。更。名。な。る。を。も。知。べ。し。又。大。脚。大。為。大。
石。と。書。る。も。字。面。の。か。は。ま。る。の。み。あ。て。皆。全。同。じ。然。し。
ハ。當。昔。字。や。云。し。例。證。と。は。い。べ。く。も。何。ら。ぬ。ど。字。と。い。
ふ。もの。し。も。の。ふ。見。え。多。る。始。な。れ。ば。ま。づ。あ。ら。う。引。つ。
孝德天皇。卷ふ。大伴。長德。連。字。馬飼。同卷。下。藤。我。日向。字。
身判。此等も上。同。お。く。多。だ。更。名。を。漢。文。よ。字。や。書。き。
は。里。て。字。や。云。集。中。の。此。下。十。七。ふ。大。伴。田。主。字。曰。仲。
郎。十六。一。丁。豊。人。歌。ふ。造。駒。土。師。乃。志。婢。麻。呂。云。云。や。何。
りて。右。歌。者。傳。云。大。舍。人。土。師。宿。禰。水。通。字。曰。志。婢。麻。呂。
也。於。時。大。舍。人。巨。勢。朝。臣。豊。人。字。曰。正。月。麻。呂。又。同。卷。十。二。

三家持卿歌ふ。石麻呂爾吾物申云々。何りて。右有吉
 田連老字。曰石麻呂。云云。など見えたり。女の字は。次現
 報靈異記。大和國添上郡。有一凶人也。其名未詳。字曰
 瞻保。又奈良古京藥師寺僧顯惠禪師。字曰依網。禪師。俗
 姓依網。連。故以為字。云云。彼里有一凶人。姓文忌寸也。字
 曰上田三郎矣。又利苧。優婆夷者。河内國人也。姓利苧。村
 主。故以為字。又彼牛云々。而言我者在櫻村物部麻呂也。
 字。號塩春也。又牟婁沙彌者。榎木氏也。自度无名。紀伊國
 牟婁郡人。故字。號牟婁沙彌者。又丹治比。經師者。河内國
 丹治比郡人。姓丹治比。故以為字。あど見ゆ。又家傳僧空海作

上卷云。内大臣諱鎌足。字中郎。云云。此外よもな不有べ
きを今ハおろる多
記得あるおみを舉つ。又凡そ字を頁至し人も多か
けむ。されど史籍あどよハ。官位氏姓名のみを載ら
其外の古書よも。大らと字をバ記さむ。そハ上よも云
る如く。字ハ制禮の外よて。漢國の如く。氏姓名の列よ
ハのせけふ。など何るよよれバ。名の外よ負せてよふ
がゆあるに。アサナ
 を阿邪名といへる。ね里。ゆてをば。もはら人より呼名
 なるが故ふ。右の依網。禪師。利苧。優婆夷。丹治比。經師。な
 の。如くならぬ。や。人もよ。漢人の字やいふものふ。
 の呼なき多るうへハ。字なり。漢人の字やいふものふ。
 大ら多は似とる故よ。や。て其字を用ひ来しなり。か
 て右の大伴。田主の字。仲郎。ま。文忌寸。姓の人の字。上
 田三郎。鎌足。大臣の字。中郎。や。いひ。類よよきバ。後の
 世よ。某二郎。某三郎。など云を。字を云も。そきと。同トこ
 となり。又某左衛門。某右衛門。某兵衛。某大夫。某助。某丞

其進なげいふも、もとは官名を犯せるわざよて、あるらざることには、さらぬることなむら、名の外よぶら。是等をも阿那名といはむ。素性法師集よ。天督の御ハ、あるらぬことよハ、何らば、素性法師集よ。天督の御獵せさせ給て、河内國よ、やむせ給よ。まうり帰のなむと申しを惜ませ給て、素性が阿那名をよよりとつけさせ給よ云云。玉海月輪禪定兼實公日記よ。安元三年四月廿日宣旨、依奉射神興給獄所輩平利家字平同家兼字平五田使俊行字難波五郎藤原通人字加藤田同成直字早尾十郎同光景字新景次郎ま多新猿樂記ふ。大君、夫云々。字尾藤太。名傳疑治ルま多中君、夫云々。不知姓名。字元名。勲藤次。又五君、夫云々。姓菅原名匡文。字菅綾三。又七、御許者云云。件夫、字

越フカ方部津五郎。名津守持行云云。吾妻鏡卷一よ。北條殿、雑色字源藤太。ま多卷二惡僧張本戒光字。大頭八郎房。ま多卷四番匠一人字觀能者。又内府子息六歳童形字。副將。又卷五中將惟盛卿嫡男字。六代。ま多甘繩邊。土民字。所司二郎。又卷六左馬頭御使字。藤内。又卷八伊勢國志礼石御厨子。字輪田右馬。元ま多山賊主字。王藤次。又卷九季衡子息字。新田冠者經衡。又卷十犬丸菊松地頭字。美濃道上。又卷十將軍家若君字。善哉。又卷十八大將軍二男若君字。千幡君。又卷一能景舍弟小童字。江丸。又卷一左京兆孫子小童字。戒壽。又卷九左親衛妾男子平産云云。今日被授字。寶壽。元亨釋書

七卷よ。釋辨圓字圓爾以字行。十一よ。釋真興。棲子島。後人貴之不字。呼子島。先德十三よ。釋俊苜字。不可棄。十七よ。鎮守府將軍平維茂者。前將軍貞盛之姪也。以有勇材。養為子。字之曰餘五。今昔物語よ。丹波守平貞盛也。云けり。兵の弟よ。武藏權頭重成と云が子。上総守兼忠が太郎なり。其を曾祖伯父貞盛が甥が子など。皆取集て養子よ。けり。此維茂は甥なり。亦中よ。年若うり。けり。十五郎よ。立て。養子よ。けり。字を餘五君とは云けり。なり。物語ふ。備中の國■の郡ふ。藤原の文時也。云者有けり。字をバ大藤大夫と云。又陸奥の前司平朝臣孝義と云人あり。其家よ。郎等よ。仕。男有けり。實名は不知字をバ藤二とそ云けり。又藤原諸任字をバ澤勝五郎と云。

又上総守平維時朝臣。云云。其郎等よ。家名はあらび。字ハ大紀也。云者何里。又傳大納言と云人おは。き名を道綱也。云々。其家よ。ひさ。くつあはる。侍あり。字を内藤と云など。見え多り。大和物語よ。藤原忠文が男の事を。わらハよ。て殿上して。大七といひけり。源氏物語玉蔓よ。この三条よ。とはむ。兵藤太といひ。人。こまよ。あそ。何らめ。あどあるも。皆所謂。あざあなり。かくて又其餘よ。續紀一。廢帝天平寶字二年。以紫微内相藤原朝臣仲麻呂。任大保。勅曰。云云。朕舅之中。汝卿良尚。故字。稱尚舅。云云。三代實錄十。藤原朝臣良繩卒。良繩字朝台。又七十。春澄朝臣善繩薨。善繩字名達。文德天皇實錄五。和氣朝臣貞臣卒。貞臣字和仁。八

永宿禰繼麻呂卒。繼麻呂字宿榮。又卷十文室朝臣助雄卒。
 助雄者云云。字王明。又山田連春城卒。春城字連城。文粹
 八卷。延曆寺尊敬上人俗姓橘氏名。在列字鄉十卷。小
 崇仁坊北有一風亭。姓源字文。是其主也。十二。藤原有章。
 讚。字曰藤群。源元忠。讚。字曰源桂。など見え。江談抄
 二卷。藤慶者。道明大納言。藤文者。右衛門。藤賢者。有國。字。
 式大者。惟成。字。字。何り。又此餘。文屋康秀を文琳と云。
 菅家を菅三字云。三善清行を三耀字云。紀長谷雄を紀
 寛といひ。平貞文を平仲字いひ。曾根好忠を曾丹とい
 ひ。類。儒者のせーことふて。是は常々呼交れ字よも

何らむもや漢人此字よならへる物よ。かの字とも
 亦自異なり。又源氏物語未通女。卷。夕霧君よ。ひむあ
 しの院よて。あざ名つけし。こ字も見ゆ。抄。學生入學
堂監。書くだけ名簿よ。あぢなを書なりと云り。中ご
る儒者よるもの。せしめと何りしや。但し此ハ古
昔ハ已冠而字之といふ禮式の必行ハ也。ことなる
よ。當時此式の廢きて。行はれざりしら。人とも免づ
ら。く。何や。きことよ思へるさまよ。書なせるなる
べし。さるハ。此字つく空云。きはやる典式のも空
よりなり。り。此字を。何りを口をきことよ。の収て思へ
るより。り。ぎやを此頃。廢き居多る事のやう云るな
ら。又旅人を淡等。公卿補任よ。大伴宿禰旅人。天平二年
む。誤なり。旅人を淡等とも。史を不比等。馬飼を宇合。長谷
多比等空も書る形至。雄を發昭。清行を居逸。葛野を賀能。匡房を萬歳と書る

類は反名とありひしものよて、字やも異れり。思ひ混
ふべのらび、紳鏡抄よ。式部、大輔藤原、敦光曰。賀能、乃葛
野之反名也。云々。匡房、反名萬歲。通憲、反名
民輪、猶葛野 かくて此女よ字と記せるハ、常の名男の
稱賀能也。 同ト、のこを字やも通云と見えたり。其由は、女
名ハ古より後まぐ、男名の如く、諱て人より呼ばやい
ふこやハなありし故、其證、大まき 自も稱人よりも呼し
おやなれば、名とも字やも記せはなるべし。さてその
女、字の古くより見え多るは、此下十八、石川、女郎、女
字、旦山田、六、卷、四、丁、よ。送、卿、府吏之中、有、遊行、女、婦、其、字、
女郎也。女、郎、也。 日兒島也。又二十、豊前、國、娘子。娘子、字、曰、大、十六、丁、よ。昔

者有娘子、字、曰櫻兒也。又昔有三男、同嫖一女也。娘子、字、
十八、二十、六、丁、歌よ。左夫流其兒爾云云。注よ。言左夫流者、遊
行女婦之字也。廿、卷、四、丁、よ。藤原、夫人、歌。淨原、宮、御、宇、天、
皇、之、夫、人、也、字、曰氷上、大、靈異記よ。粟國名東郡埴村有女人。字、曰、多、夜、
刀、貞、也。 吾妻鏡卷、四、よ。伊豫守義仲朝臣妹公字、菊。又五、豫州
名、未、詳。 妾女字、静。又十、故左典厩、御乳母字、摩々局。又十、故將軍
姫君字、三幡。今昔物語よ。姓は文の忌寸、字ハ上田の三
郎也云々。其人の妻あり。姓は上毛野の公、字は大橋
乃女也云々。見え多り。かくて又な、不、つ、い、で、 此餘
よ。田地の字、不、子、こ、も、や、古、き、代、の 某、字、や、い、ふ、六、と、何

靈異記よ。諾樂京東山有一寺。號曰金熱。金熱優婆塞。住此山。故以為字。まよ沙門信行者。紀伊國那賀郡彌氣里人云々。其里有一道場。號曰彌氣山室堂。其是は多村人等造松之堂。故以為字。など何了類なり。

だ名をいふ六とを。字や書

オホ ナ コヲ ヲチ カタ ヌヘ ハ ニ カル カヤ ノ ツカノ

大名兒。彼方野邊爾。苧草乃。東

間毛。吾忘目八。

大名兒ハ。第四句の次よ置て心得べし。畧解よ。岡部氏。大名兒ハ。其女を崇えてのあまへるなり。やあれど。然る例なり。みだりこやなり。女郎字を何るハ。動のぬこ

新古今集よ。坂上是則うらかる。淺茅が原のかる。藍の乱れて物を思ふ。頃哉とあるハ。原よと有しと。後よ罵し誤れらう

と。な。金。ゆ。て。ま。多。名。姉。名。兄。又。大。名。持。な。ど。名。を。も。て。和。免。お。や。い。せ。い。ハ。古。の。常。なり。や。云。る。も。あ。い。あ。て。なり。那。那。兄。な。ぎ。い。ふ。類。の。那。は。名。の。義。よ。ハ。何。ら。ど。大。名。持。の。名。も。同。く。は。い。く。別。よ。考。何。り。○。基。俊。家。集。よ。大。名。兒。が。草。刈。岡。の。さ。ゆ。り。を。の。志。め。ゆ。ふ。ま。で。ハ。人。よ。志。ら。る。と。ある。此。ハ。こ。の。御。歌。を。云。々。よ。大。名。兒。が。刈。草。の。と。い。ふ。意。よ。見。○。彼。方。野。邊。爾。ハ。何。多。の。野。邊。よ。て。ぞ。れ。る。も。の。○。大。被。詞。ふ。彼。方。之。繁。木。本。乎。集。中。ふ。や。い。は。む。ぶ。ご。と。一。大。被。詞。ふ。彼。方。之。繁。木。本。乎。集。中。ふ。も。彼。方。の。埴。生。此。小。屋。な。ど。よ。免。り。○。苧。草。乃。苧。字。拾。穂。や。作。は。十二。四。十。ふ。三。吉。野。之。蜻。乃。小。野。爾。刈。草。之。念。乱。り。而。や。も。よ。め。里。を。も。加。夜。や。云。は。芒。の。こ。と。あ。く。既。く。云。る。が。如。一。種。の。名。を。後。々。は。苧。萱。と。い。ふ。を。加。夜。の。一。よ。免。る。ハ。あ。ま。り。よ。可。笑。さ。さ。て。此。ま。で。ハ。東。間。を。云。む。よ。堪。が。と。き。わ。び。ぞ。ら。い。

萬葉古義二上

ま

料の序なり○東間毛（東北下拾穂本は一握の間も小）
 て。みじのく志むのほやもといふこやなり。十一
 九（多）ふ。紅（多）之淺葉乃野良爾苜草乃東之間毛吾忘渚菜四
 卷（多）十四。ふ。夏野去小牡鹿之角乃東間毛妹之心乎忘而
 念哉（多）金葉集よ。朝日やも月やもこらげ東の間も君を
 念哉（多）忘る、時しうけきバ新古今集延喜御製よ。東路
 の間もなく戀やもあらむ。○吾忘目八ハ、吾忘をむ
 やはの意なり。目ハ半の加よへるなまハは也波のハ
 なり○御歌意ハ志ばーバのりの間なりとも。忘る、
 ひま何らバきこーハ心の暢こやもあるべきよ。そこ
 のこやを戀ーく思ふあゝろハ、ひやへふるゆみなき。

そのころーさきびいおばのまを

か思ふよややのままへるなり

イデマセル ヨシ マノ ミヤニ トキ ユ ゲノ ミ コノ オクリ

幸于吉野宮時弓削皇子贈

與額田王御歌一首

タマハル マカ タノ オホキニ ミ ウタ ヒトツ

幸于吉野宮云云。持統天皇吉野へ復幸せるこや。一卷
 よ云る如く。四年庚寅五月。幸吉野宮。五年辛卯四月。幸
 吉野宮。や書紀よ見え多れば。今はいつの年月とも分
 か多ー○弓削皇子は。天武天皇紀よ。次。妃大江皇女生

長皇子與弓削皇子持統天皇紀小七年正月授淨廣貳
續紀小文武天皇三年七月薨監護喪事皇子天武帝第
六皇子也。字見えあり。○與字拾穗本よは

な一〇御字舊本脱せり例よよりて補つ

古爾戀流鳥鴨弓絃葉乃三井

能上從鳴渡遊久

古爾は古を字いはむが如一〇戀流鳥鴨ハ。鳴呼戀一
く思ふ鳥よてあきばよの意なり。鴨ハ疑ひく歎息

く辞なり鳥ハ奉和歌よよるよ。霍公鳥なり。○弓絃葉
乃。絃は弦空通し用ひ一なり。上よも。十四五丁よ。安杼
毛。敞可阿自久麻夜末乃由豆流波乃布敷麻留等伎爾
や。あまて。木の名よ依る地名なるべ一〇三井能上
從。字は。三は借字よて御なり。上ハその阿よりをいふ。
從は字やいはむがごと一御井のあよりをの意なり。
さてこの三井は秋津離宮の邊よ在るるべ一〇渡字。
元曆本よハ濟や作里〇御歌意ハ霍公鳥の今このや
ころよ鳴こころハ昔御父天皇のいでまし。其時を。
わが戀一く思奉るごやく。戀一く思へばよや。處一も

ありよ。此御井のあまりを。心有りげよ。鳴わさりゆく
 よ。宣ひて。額田王ふおどろろし。聞し賜ふなり。今持
 統天皇の。行幸の。從駕ありて。其昔を戀しく。思しめ
 を御心より。鳥の聲よ。感を興し。告遣給へるのみ。
 又ハ先帝の。行幸の。度よ。ハ。額田王も。共よ。從駕へられ
 しよ。此度ハ。京よ。留られぬ。共よ。御供つらへし。昔
 を慕給ふよ。もあるべし。古今集よ。昔邊
 や。今も。戀しき
 知と。いぎに。古郷よ。も。鳴て。来つらむ。
 これも。古を。戀るよ。云。思。念。づし
 ヌカ。タノ。オホキミノ。マツレル。コタヘ。カタ。ヒトツ

額田王奉和歌一首

元曆本官本古寫本拾穗本

等よ。從倭京進入や。あり

古爾。戀良武鳥者。霍公鳥。盖哉

鳴之。吾戀流其騰。

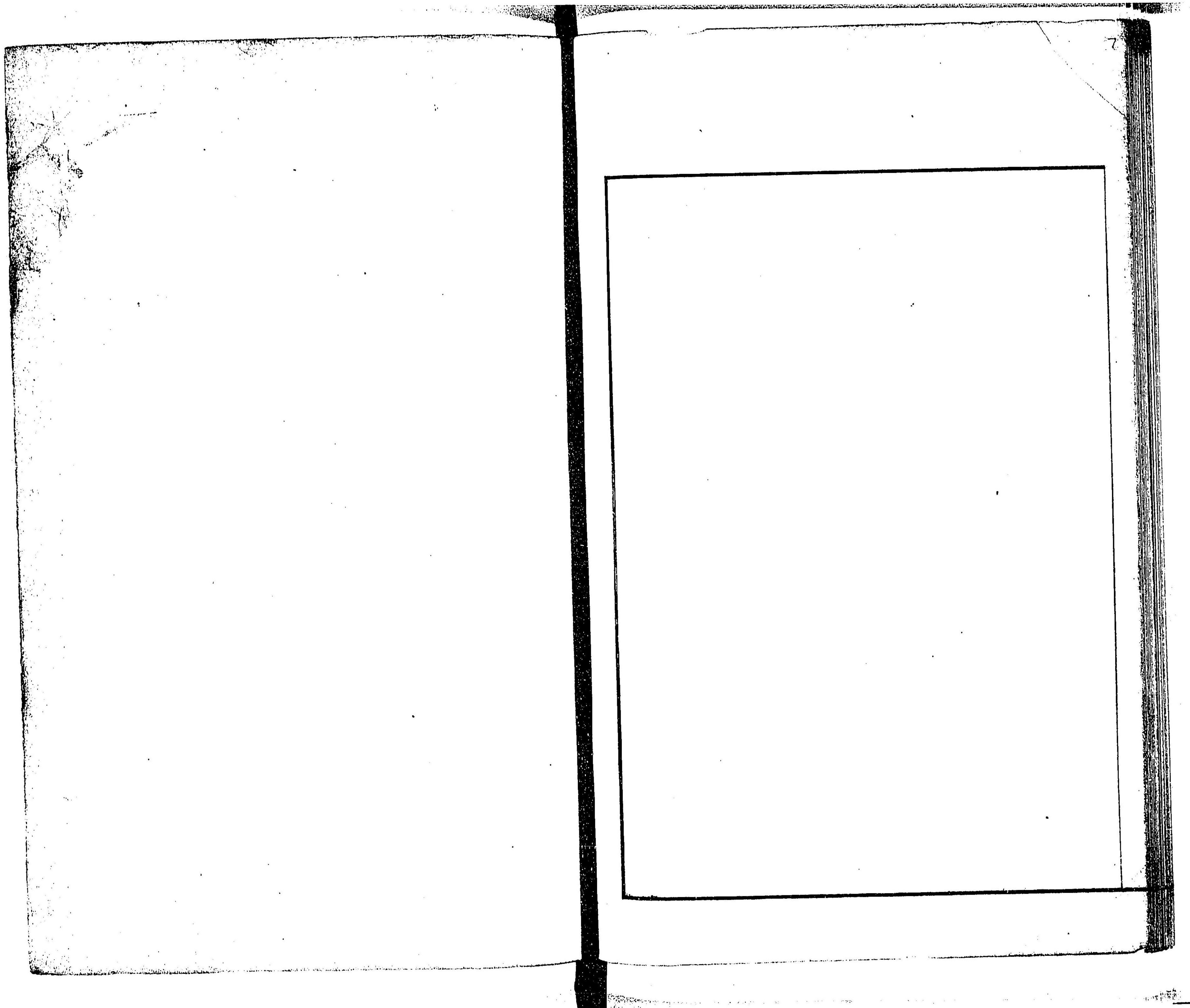
イニシハニ 古爾ハ。上の如く。古を。や。いはむ。が。如し。○霍公鳥ハ。品
イニシハニ 物解よ。云。蓋哉。鳴之。とは。蓋哉。ハ。の。意。なり。
イニシハニ 新撰字鏡よ。儻設也。若也。侗也。太止比。又介。太志。と。あり
イニシハニ 鳴之。は。其。過去。し。こと。を。云。る。なり。や。吾。古。を。戀。し

く思ふ如く古を戀て鳴しならむの謂なり。蓋ハ戀流
ヘ關ク見ベシ。岡部氏考よ其鳥ハけぶし不やぎん
ちさの多 本居氏からぶみよ蓋と云る字ハおほあ
物をおしはありてさだえゆるやころよおけるやう
よ見ゆるをそまやハ意もいひさまもかは至て集中
よはわーかくも何らむやいふとありよつひと
り。此歌はほやぎんハいよーへを戀る鳥やいふな
れバ今鳴つるもそーわがごとく古をこひて鳴ふる
あや何らむやいふ意なり。三卷よ山守ハけぶし何り
やもと何るはわー山守は有ともなり。同卷よけだし

あはむうもや何るハわー何ふこやもあらむうなり。
四卷よけだしーくもやいへるはわーもな至。又けだし
夢よ見えきやや何るはわーそれ故よ夢よ見えさる
るなり。又けぶし門よりかへーなむらもはわー門よ
りかへーやせむ那至。集の中なるいづきもかくの如
く見て聞ゆるな至。其中よ十九よけぶし何へむらも
や何るひやつハけこしあがへるごと聞ゆきと。意
はあへる何られむらもーハえあへけらむらや云る
なり。何へハ堪なりや云り。巴上本 居氏説 なる十五よ。和我世
故之氣太之麻可良婆思漏多倍乃蕪低乎布良左禰見

都追志努波牟十七ふ氣太之久毛安布許等安里也等
云々十八ふ安須能比能敷勢能宇良未能布治奈美爾
氣太之伎奈可須知良之底牟可母那とあるも皆件此
意なり又十一八丁ふ馬音之跡杼登毛為者松陰爾出
曾見鶴若君香跡十二丁ふ夕々吾立待爾若雲君不來
益者應辛苦又十六五丁ふ奥去哉赤羅小船爾裏遣者
若人見而解披見鴨也何りこの若も右の歌也も依て氣太
之ミヤヨむ○吾戀流其騰ハ吾古を戀一く思ふ如くの
べきなり其騰ハ騰の濁音字を書如なり○歌意ハその
御井の何しりを心何りげよ鳴こり行つるハ古を

戀一く思ふ鳥よて何きバよやや宣ふ其鳥ハ霍公鳥
よて何るなるべし不やしぎはり古を戀慕ふ鳥やい
ふなれバ吾むらしを戀一く思ふ如くよ其鳥もまし
や古を戀一く思ひこ心ありげよ鳴こり行つるな
らむやなり上よいへる如く共よ御供つるへし昔を
吾戀一く思ふ如く霍公鳥もましや昔を志多ひて鳴
しならむといふ意よ見き
バいよくあまれふのし



16
125
96

